Ⅱ

クラブ視察

2014 Japan Sports Association Club Manager Training Project

9月29日（月）　18:00～20:00

TUS グレーヴェンブロイヒ

－サッカー部門－

－ユース育成コンセプト－

1．クラブ概要

TUSグレーヴェンブロイヒ（以下、TUS）は，1911年にヨゼフ・カセレン氏が若者を集め設立したクラブである。ドイツ各地でサッカークラブが設立された時期であり、例えば1904年にシャルケ、1909年にドルトムントが設立している。当時のサッカーは現在とは違い、汚い、男達のスポーツというイメージで人々に捉えられていた。

TUSはサッカーが主要な活動種目であり、その他にバドミントン、バレーボール、心臓疾患者向けのスポーツプログラム等が提供されている。また、かつて活動種目として実施していた陸上競技では、1928年のアムステルダムオリンピックで陸上200m決勝に残った選手が在籍していた。陸上競技は現在、TUSから独立して活動している。

TUSは非営利団体であるが、サッカーのトップチームの監督・選手に少しではあるが給料が支払われる。トップチーム選手の大半は学生であり、普段は夕方から練習を行い、週末に試合を行っている。

2．活動施設

TUSの活動は市所有のスポーツ施設であるグラウンド（今後ハイブリット型の芝生に改修予定）、陸上トラック、体育館で行われる。これらのスポーツ施設は、TUSに優先使用権があり、現在は使用料が無料であるが、2015年以降は使用料を支払う予定である。スポーツ施設に隣接してTUS所有のクラブハウスがある。

3．財源

主な財源は会費収入（月額子ども６ユーロ、大人８ユーロ）とスポンサー収入である。スポンサー収入は、トップチームのホームゲーム時に作成されるパンフレット（ホームゲームは年間17試合、１試合1500部配布）への広告掲載料で、年間3,000～4,000ユーロの収益となる。また、クラブハウス内のバーカウンターの年間売上げが15,000ユーロあり、売上げの内20％が利益としてクラブに入り、運営費の一部となっている。

なお、この地域のクラブは財政的に十分ではなく、現在、10のクラブが存在するが、10年後には財政的な理由から５クラブに減るだろうと考えられている。

4．ユース育成について

TUSには、13のユースチームがあり、約270人の会員がいる。その内、女子チームはアンダー15、アンダー17の２チームで、約30人の会員がいる。ユースチーム、女子チームの監督やコーチにも、少しではあるが給料が支払われている。また、TUSはドイツ１部の「フォルトナ・デュッセルドルフ」と業務提携を結んでおり、プロから指導を受けることができる。

会員は口コミの評判で集まるが、社会問題となっている少子高齢化や、ボランティアスタッフの減少、学校制度改革による全日制導入により、子ども会員は減少傾向にある。

イギリスのクラブではクラブ会員500人の内、プロ選手となるのは１人である。TUSがユースサッカーを行う一番の目的は、プロを目指すこと

ではなく、サッカーによる仲間づくりである。ドイツで少子高齢化の次にあげられる社会問題として、移民問題があり、TUSには、現在15カ国の子ども達が在籍している。この子ども達をまとめることができるものがサッカーであり、「サッカーには言葉がいらない」のである。

5．監督・コーチおよびスタッフについて

TUSを支える監督・コーチおよびスタッフは、社会人として仕事をしつつ、余暇時間にTUSの活動を行っている。今回、クラブ説明を担当した３名は下記業種で勤務している。

・サッカー部長　　：ゴイエンニッヒ氏
（保険会社　勤務）
・サッカー育成部長：トニー・プレート氏
（広告代理店　勤務）
・女子サッカー監督：アンドレー氏
（電力会社　勤務）

この他、クラブハウスでビールを振る舞うマスターは、TUS会計担当兼務であり、元銀行員である。このようにTUSは多くのボランティアスタッフによって支えられている。

例えば、女子サッカーチーム監督のアンドレー氏のTUSにおける１週間のスケジュールは下記の通りである。家族の理解もあり活動できている。

月曜日：休み
火曜日：大人の指導
水曜日：子どもの指導
木曜日：大人の指導
金曜日：子ども、大人の指導
土曜日：子どもの試合
日曜日：大人の試合

【報告：鈴木　功士】

クラブハウス内

グラウンド

クラブ入口（クラブハウス外観）

ゴイエンニッヒ氏からの説明

2
クラブ視察
The Club Management

9月30日（火）　16:00～17:30

コルシェンブロイヒ シニア世代スポーツクラブ

–クラブ活動–　–クラブプレゼンテーション–　–理事との懇親–

1．歓迎の挨拶（シュルツ理事長）

今年も日本の皆様を受入れられる事は、私たちのクラブにとっても誇りである。この地域は19世紀半ばから日本との交流がある。

ノルトライン＝ヴェストファーレン州には約３万人の日本人が働いており、その内約8,200人がデュッセルドルフに住んでいる。デュッセルドルフはドイツの中でも日本人が多い街として知られ、年１回のジャパンデーが開催されると70万人もの観客動員がある。

ドイツの高齢化率は世界で２番目であり、１位の日本に続いている。私たちは、シニア世代の人たちが家にとどまらず、外に出るような取り組みを行っており、提供しているプログラムは多岐にわたるものになっている。

2．クラブの紹介

1978年に設立し、36年間続いている。会員は50歳以上に限定しているが、特に50代は働いている方も多く、午前中のプログラムに参加できないことが多い。会員は約800人であり、その３分の２が女性である。また、会員のうち150人は夫婦である。

（1）主なプログラム

曜日	プログラム内容
月曜日	・記憶のトレーニング ・頭の体操、簡単な遊びやパズル系の頭を使うトレーニング ・ヨガ
火曜日	・ピラティス
水曜日	・朝食の会（特に人気のコース） 朝食を摂りながら意見交換をするイベントで、会員が自身の得意な分野をテーマにして話をしている。講師を招いて法律や文化について話を聞くこともある。
木曜日	・健康体操のコース 男女混合のグループを２つ作り開催している。 60名ほどの参加者のうち、各自のレベルに沿ったグループ分けを行っている。 ・カードやチェスのコース 35名程度参加者がいる。
金曜日※	・心臓疾患者向けの水泳コース 近隣のリハビリクリニックにおいて、プールを利用した水泳コースを開設している。医師が帯同している。 ※このコースは、月曜日と水曜日にも実施している。
土曜日	・水泳とケーゲル（ドイツボウリング）

（2）その他プログラム

・文化活動（月に１度劇場へ行き、オペラやバレエ鑑賞を行う）
・ケーゲル（ドイツボウリング）コース
・旅行会

日帰り旅行（年５回）	近郊の旅行で、行き先はライン川、モーゼ川やオランダなど。12 月のクリスマスシーズンにはケーキ工場を訪問する。バス２台で、100 人程度参加する。
６日間旅行（年１回）	近隣エリアの旅行で、バス１台で行く。戻ってきた後、次のグループが同じバスで再び出発する。
12 日間旅行（年３回）	北へ向かうコースと南へ行くコースの２つがある。

会員は各種プログラムの参加により健康な身体を維持し、旅行に参加することをクラブでの活動の集大成としている。

＜クラブ理事の紹介＞

・ホン・ゲーレン理事（男性）：クラブ会員のツーリスト企画担当
・バレンティン理事（女性）：会計管理の第２財務担当（劇場へ行く際の会計が主な業務）
・バークナー理事（男性）：心臓疾患者向けのスポーツコースを重点に担当
・ユーベン・ペータス理事（事務局長兼務・男性）：クラブの財務と会員の管理を担当
・フォースリッパー理事（男性）：上部団体（スポーツ協会）との調整業務を重点に担当
・ノエンドルフ理事（男性）：音響や会場設営などの技術担当
・ハンベルマン理事（女性）：事務担当

３．会費等

一律で徴収する会費はなく、次の通り各プログラム別に会費を集めている。

ベーシックコース	4.5 ～ 5.5ユーロ / 月
心臓疾患者向けスポーツ	6.5ユーロ / 月
水泳コース	7.0ユーロ / 月
ヨガ（10回）	会員25ユーロ、非会員35ユーロ
旅行	日帰り旅行33 ～ 39ユーロ 12日間旅行 400 ～ 500ユーロ
観劇	会員20ユーロ、非会員25ユーロ

シュルツ理事長

クラブの紹介バナー

4．質疑応答

(Q)
心臓疾患者向けスポーツに対して何らかの補助金は出ているのか。
(A)
医師による運動処方の診断書が発行されている場合は保険適用となり、個人は6.5ユーロの負担で参加が可能である。保険が適用されなければこの程度の個人負担金では実施できない。

(Q)
運営にあたっての問題点はあるか。
(A)
各競技団体やスポーツ連盟等、上部団体からメリットを受ける為には、クラブがそれぞれの団体の会員になる必要がある。ただ、このシニア向けクラブは、実施プログラムを見ればわかるように、どの競技団体の会員になるべきか悩むことになる。このため、このクラブは特定の競技だけを扱う競技団体ではなく、複数種目を包含している団体に加盟している。
競技団体にとっても、会員数の獲得は重要な課題であり、近年、会員の取り合いになっている。この問題に対する解決策は見つけられていないが、これはクラブの問題と言うよりは、競技団体やスポーツ連盟側の問題である。

(Q)
ドイツの健康保険制度をもう少し説明して欲しい。
(A)
健康保険は働いている人に義務づけられており、収入額の18～19％の保険料を支払うが、その半分は雇用主側が負担する。また、月額収入が5,000ユーロを超える人は、義務保険以外の保険にも加入できる。

5．ケーゲル（ドイツボーリング）と懇親会

視察終了後、クラブハウスから場所を移動して、クラブが提供するプログラムのひとつであるケーゲルを理事の皆さんと体験した。ケーゲルとはボウリングの起源となるスポーツで、ボウリングに類似したボールで９本のピンを倒す競技である。いくつものルールが用意され、奥が深い競技として親しまれている。

【報告：田村　泰啓】

ケーゲル体験１

ケーゲル体験２

3
クラブ視察
The Club Management

10月1日（水）　18:30～20:00

オルケン体操クラブ

－クラブ活動体験－　－理事との懇談－

1．クラブの概要

（1）クラブについて

オルケン体操クラブは1896年に設立された、今回視察した３つのクラブのうち最も歴史のあるクラブである。運営費はそのほとんどを会費収入で賄っている。

・会員数約900人
・実施種目数25
（体操・サッカー・バドミントン・バレーボール・護身術・陸上競技・音楽隊など）

（2）クラブ施設について

ドイツのスポーツ施設は、そのほとんどが行政の所有物であるが、オルケン体操クラブの施設はすべてクラブの所有物である。このため改修や補修はすべて自主財源で行っている。

＜近年の施設整備の動き＞
・1961年：旧体育館を改修
・1991年：新体育館・クラブハウスを改築
・2015年：旧体育館の床板の張り替えを予定
費用（300 ～ 400万円）は全て自己資金を充当

＜施設の紹介＞
①新体育館（メイン）
バスケットボールコート１面ほどの広さがあり、様々な活動が行われている。床は少し柔らかいクッション性のある構造になっており、怪我の予防にも有効である。

②旧体育館
設立当初からある体育館。新体育館（メイン）の半分ほどの広さがある。床は新体育館（メイン）同様、少しクッション性のあるものが使われている。床板の老朽化に伴い、来年度張り替え予定である。

③舞台設備
新体育館（メイン）と旧体育館を接続する部分に舞台設備が設置されている。普段はそれぞれの体育館をカーテンロールで仕切っているが、イベントに合わせて、この舞台を出すことができる。舞台は上下に稼働（約80cm）し、発表会やコンサート時のステージとしてだけでなく、椅子をならべ

クラブの音楽隊

サッカー場

れば観客席として使用することもできる。

④人工芝グラウンド
サッカーコート１面分の広さ。ドイツの気候特性上、天然芝や土のグラウンドでは天候に左右されやすいが、人工芝グラウンドにすることで、１年中活動することが可能となった。

⑤陸上競技練習設備
100ｍ×４レーン（タータンレーン）。砲丸投げ場も整備されている。

⑥ビーチバレーボールコート
屋外に設置され、専用の砂を敷き詰めている。

⑦トレーニングルーム
ウエイトマシーン・フリーウエイトが置かれている。自転車トレーニングもできる機器も設置されている。筋力向上、健康・リハビリ目的で様々な人が利用できる。

⑧クラブハウス
クラブハウスは体育館のある施設の２階にあり、壁にはクラブフラッグや数多くのトロフィーが飾られている。クラブメンバーの集う場所としても機能しており、バーカウンターに座って交流することもできる。部屋の窓からは、新体育館（メイン）を見下ろすことが出来るため、体育館内の活動の様子を観覧することができる。

⑨その他
クラブの屋根付きフリースペース（中庭）で、クラブメンバーが集ってバーベキューなどが行われている。子どもたちが遊ぶこともできる場所である。

ビーチバレーボール場

体育館

２．オルケン体操クラブの方々との懇親会

クラブハウスにおいて、クラブメンバーの方々と懇親会を行った。懇親会ではクラブ会員で組織する音楽隊による、歓迎の演奏を披露して頂いた。日本派遣団はそのお礼として、「沖縄のカチャーシー」を披露。クラブの方々と一緒に楽しい交流を行った。

【報告：花輪　和志】

日本団答礼の舞（カチャーシー）

Ⅲ

団員レポート

2014 Japan Sports Association Club Manager Training Project

団員レポート 1

久保田　智

わくわくピース総合型クラブ
副会長

1．予見と検証

ここ数年、私は北海道のクラブアドバイザーとして、本事業の団員を推薦する立場であったが、今回、自分自身が参加するにあたって、過去に参加された方々やドイツ渡航の経験がある先輩の話を聞きながら、出発までの間、ドイツのスポーツクラブについて想像していた。

国の施策が開始されて20年ほど経った総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）に携わって10年近くになり、自分自身が描いた総合型クラブの青写真が現実となり、新たなステップへの橋渡しにドイツ研修という言葉が頭をよぎり、さらに公認クラブマネジャー養成講習会で学んだ「予見」という言葉。まさに自分にとってドイツのスポーツクラブは本場であり、今まで予見に過ぎなかったことに気づき、しっかり検証することを決意した。

過去５年間分の団員のレポートや事前研修会で講義を受けた話の中から、近年、ドイツの学校運営の状況が変化していることに伴うスポーツクラブの運営への影響ついて知ることができ、今の日本における総合型クラブ事情に重ねることが多くなっていた。今回の研修が、このような事前の理解を実際に現地で確認できる機会となり、日本における持続可能な総合型クラブを目指すためにはどのような取り組みをすべきなのかを考えるきっかけになるのではないかとの期待を胸に抱いた。

2．直行便でデュッセルドルフへ

成田空港からデュッセルドルフ空港まで12時間。今まで体験したことのない時間を過ごした（それまではJRでの乗り継ぎによる９時間乗車の

経験が最長であった）。機内は快適で、時間の許す限り映画やビデオを見て楽しんだ。機内食も美味しくドイツに向けて気持ちは高鳴るばかりである。デュッセルドルフ空港到着後、まず感じたのはむやみやたらに場内放送が流れない静かな空港内の環境である。ただそれだけで日本との違いを感じ、ドイツに到着したとワクワク感でいっぱいであった。空港からは車でグレーヴェンブロイヒへ移動。車中から眺める景色が北海道に似てるように感じたのは自分だけだろうか。

3．ドイツでの研修

研修は、クラブマネジメント指導者海外研修の名に相応しい内容であった。9時の開講から夕方17時の終了。そこからクラブ訪問。まさにドイツのクラブマネジメントを体感できた。毎朝８時30分にホテル前集合、徒歩にて20分程すると研修会場であるライン・ノイス郡庁舎に到着。食事のことを考えるとこの往復40分のウォーキングは体調管理に役立った（昼食のボリュームがすごかったので）。

今回の研修でドイツのクラブ事情を知るにつれ、日本において先進的な取り組みをしている総

合型クラブとの差を感じないケースもあり、やはり地域に根付くクラブ作りが成功への鍵であることが実感できた。

4．クラブ訪問

自分が目指すクラブが、しっかりドイツには根ざしていた。TUSグレーヴェンブロイヒ、コルシェンブロイヒのシニア世代クラブ、オルケン体操クラブ、それぞれが伝統と特徴があり、人の繋がりを感じるウキウキする場所があった。楽しい場所には人が集うという環境がそこには存在していた。おもてなしの手料理やケーキ。そしてビール！

小・中学生の頃の地域大運動会を思い出す賑やかな楽しいひと時であった。

5．ドイツと日本

日本が今後進むべき方向やクラブが取り組まなければいけない事は、ドイツがしてきたことである。地域住民が子供を育て、育った子供が地域を育て、次の世代を育てていくという好循環が大切である。ドイツでは青少年会員の減少が、その後のクラブライフの永続性に影響を及ぼしている。これは、いま日本が直面しているクラブ会員確保の問題に通じるところがある。

何のためにクラブがあるのかを検証し、地域になくてはならない存在にするのがこれからの日本に求められることであり、既にその段階を終え、それをいかに継続させていくかが課題となっているのが今のドイツである。少子高齢化という新たな局面を迎えている両国にとって、これからも国境を越えた連携は大切である。

6．最後に

自分自身が掲げた「予見の検証」は、日本における「総合型クラブ」という新たなツールの重要性を手応えとして感じることができた。学校を中心とした地域づくりは、ドイツも同様であり、育つ子供たちは宝である。それに加え地域住民の健康維持は、少子高齢化には必要不可欠なものである。つまり、今後の日本において、総合型クラブの存在は、必要不可欠なものになるのは間違いないという答えが今回の研修で得た最大のおみやげである。

また、チームワーク最高の今回の派遣団仲間に感謝です。

団員レポート2

大谷　正巳

クラブラッキー
事務局長

1．参加した動機について

私は、35年以上にわたり、柔道スポーツ少年団の指導者として携わると共に、埼玉県スポーツ少年団本部員の立場にあり、約10年前より毎年県内数ヵ所で指導者を対象として子供の指導のあり方、安全指導、等の研修会講師を担当している。

同時に地域に根差したスポーツクラブを目指し、地域住民の協力を得てゼロから立ち上げた総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）が５年目となり、クラブ運営の方向性に多少の迷いが生じている。

このような状況で、私がこの研修への参加を決意した理由は次の２つである。

○単純にスポーツ少年団のような団体を束ねるだけのスポーツクラブでなく、本来望まれる総合型クラブの姿は如何なるものかを明確に把握し、クラブ発展の基礎を確固たるものとしたい。

○複数種目を行うことが常識の外国にあって、如何にして子供達の可能性を高めることができているのか。先進国の状況を学び、自らのクラブ運営に生かすと共に、スポーツ少年団や学校のクラブ活動との協同等、同様の悩みを抱えるクラブとも連携を図り、全ての年齢層でスポーツに何らかの係わりが持てるような地域社会を創り、子供を地域で育てる風土（マインド）とすることの一助としたい。

2．講義内容およびスポーツクラブ視察について

研修に臨むにあたり、私は次の４点について、それぞれの課題解決のためのカギを見つけたいと

いう欲張りな期待を抱いた。

①子供の指導のあり方
②望まれる総合型地域スポーツクラブの姿
③スポーツ少年団、学校のクラブ活動との関係
④全ての年齢層がスポーツに関わりが持てる地域社会を創る

我々が訪問した先は、ドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州ライン・ノイス郡である。

訪問先での講義内容から判明したことは、行政およびスポーツ連盟がケルン体育大学と深い協力関係にあり、行政（州レベルから町レベルまで）は、大学の研究成果に基づき、スポーツ施設の新設・改修等のハード面の計画的な取り組みを行っており、場当たり的発想に基づく取り組みではないということである。

スポーツ連盟も行政と同様、大学の研究成果に基づき、各レベル（国から町）で、住民のスポーツ活動プログラムに活用し、課題に基づく方針、目標、活動内容、指導者育成や指導者資格、各クラブの相談等を行っている。逆に大学の研究内容に対して各クラブが協力してデータを提供する場

合もある等、州や町それぞれのスポーツ連盟がソフト面を担当している。

また、ドイツではスポーツの必要性を底辺から訴えるボトムアップによるスポーツ活動が根づいており、トップダウンによるスポーツ振興は受け入れられない状況にあるという。

特に私が日本での予備知識と想像以上に異なると感じた点は、多数の人種が生活している移民国家であること。スポーツ指導には全て明確な指導者資格が必要であることである。

私が所属するクラブには日本人以外の会員がいない為、国民性が異なる場合の指導方法がいかなるものか想像しがたいものがある。また、指導者の大半がクラブ内指導者であるため、今後は有資格者を増やし、より高いレベルのプログラムを提供する必要があると感じた。

クラブ訪問で驚いたことは、いずれのクラブも素晴らしい施設を持っており、しかも我々が宿泊したホテルから徒歩で15～20分程度の距離にあるにもかかわらず、訪問したクラブ以外にも地域内に複数のクラブが共存していた点である。日本の感覚で想像するに、中学校区毎にクラブが存在しているような状況ではないか。

それぞれのクラブは100年にも及ぶ歴史に培われた誇りが感じられ、文化的な活動を含め幅広いスポーツ活動が着実に展開されている様子を目の当たりにした。

日本で入手した書籍、ネット、人、等からの情報で相当の知識を得ていたため、その確認程度という思いで出発したが、クラブ訪問で得た内容は想像を遥かに超えており、現地を訪れた意味は大変大きかった

3．疑問点に対する解決の追及

各講義内容、クラブ視察、クラブ関係者との面談、通訳とのやり取り等を通じて、自分の疑問点を解決するカギを見つけたい気持ちで臨んだ研修であったが、その幾つかのカギは捕まえたように思われる。直接現地で生の声で講義を受けると、予め得ていた情報の確認はもとより全ての講義内容が新鮮に感じられた。

まず、「①子供の指導の在り方」については、スポーツを楽しむ、楽しませる工夫をすることが一つ目のカギである。

子供たちが本当に自由と感じてスポーツを楽しめる環境を提供することこそが重要である。強さを求める指導は、少なからず選手を半ば強制的にコントロールし、子供達自ら楽しむという要素が損なわれていないだろうか。団員減少に悩むスポーツ少年団も同様であり、楽しいクラブには必然的に団員が集まってくるのではないだろうか。企画力、指導プログラム等、我々指導者の腕の見せどころである。

ドイツの家庭では子供のしつけが厳しく、他人に迷惑をかけるようなこと、失礼にあたるようなことは家庭でしっかりと教えるとのことである。我々親達は、しっかりとした作法を子供達に伝えているのだろうか。スポーツ指導者等に任せていないだろうか。残念ながら最近の子供達の振る舞いは親である我々を映しているように思われてならない。

次に、「②望まれる総合型スポーツクラブの姿」については、クラブ会員が自分のクラブであると自覚することが二つ目のカギである。

訪問したクラブの中には、クラブの財産である土地の一部を会員が分担して購入し、自分の持ち物としているところがあった。説明してくれたクラブ会員が「この土地の一部分は私のもの、このクラブは私達のものよ」と得意げに説明してくれたことが印象的であった。

クラブ会員自身がここは自分のクラブだと愛着を持って他の人に自慢できるようなクラブにするアイデアが最も必要であると感じた。

次に「③スポーツ少年団、学校のクラブ活動との関係」については、将来性ある子供達の発育・発達を勝利至上主義によって壊さないことが三つ目のカギとなる。

ドイツでは子供達の学力向上を目指して授業時間が午後まで延び、学校での拘束時間が長くなったためスポーツクラブでの活動時間が減少した。

そのためクラブの指導者が学校に出向いて指導することがある。この点、日本のスポーツ活動は学校における部活動がメインであり、時間的な制約の中で行うスポーツとしては日本が先行しているのかとも思われる。

ドイツでは子供達のスポーツ活動の中で、スポーツは楽しいものということを体験させるとともにボランティア活動も体験させる。これらの事を指導者が教えている。

しかし、日本の指導者の取り組みはスポーツとして楽しむ感覚よりも、試合で勝利することに重点が置かれているのではないか。

競技スポーツを否定するものではないが、学校、父母会、選手、ともに大会で良い結果を期待し、結果の評価を受ける指導者もその期待に応えるべく選手強化に躍起になっている。

そして、選手が現役から退くとき初めて社会への復帰を考えるのが日本の現状であるが、ドイツでは競技と学業は同時に進行し、引退してから新たな働き口を探すということはないということである。以前、学生がプロサッカーでの活動を優先して学校を辞めたことがニュースになり、ドイツ国民の顰蹙を買ったことがあるそうだが、これは日本が学ぶべき大変重要なことである。

競技スポーツは結果を出すことが求められる。総合型クラブは「スポーツは楽しむもの」ということを念頭に、生涯を通じて親しめるスポーツに取り組んでいる。その中から活躍する選手を育てることが将来の目標である。

これからは、スポーツ少年団や部活動を総合型クラブが学校と協力して指導する時代がすぐそこまでやって来ているのかもしれない。

そして「④全ての年齢層がスポーツに関わりが持てる地域社会を創る」ことに関しての解決手段はかなり難しいカギとなる。

ドイツではスポーツを楽しむことは自分の健康に最も重要なことであることを至極当然に市民が理解していると感じた。このことはクラブへの参加率から判ることである。

日本のスポーツは学校体育として発展してきた。従ってスポーツは学校で行うものであるという考え方であり、楽しむものであるとは習っていない。スポーツに対するドイツと日本の考え方の違いを如何にして埋めるのか、これは難題である。恐らく歴史を重ねて行くことで徐々に解決の道をたどるのではないかと思われる。

4．ドイツに学ぶ

スタートして5年目の我が小さいクラブから見ると、ドイツのクラブは全てにおいて驚くばかりであった。整備されたグランドや体育設備、クラブハウスに飾られた数多くのトロフィーや活動記録を示す展示物。

そしてスポーツ連盟でのスポーツ活動への方針、課題解決、取り組み方や指導者育成等々、100年以上に及ぶ年輪、重さ、懐の大きさ、どれをとってもドイツはすごい。

クラブ運営の方向性に多少の迷いが生じていたが、この研修を通して地道な活動を継続し年輪を重ねて行けるかどうかが最も重要なカギになると感じた。

最後に、大原団長をはじめとする団員の皆様と一緒にこの研修に参加させて頂いたことに感謝する次第である。

団員レポート3

山田　亜矢子

NPO 法人スマイルクラブ
事務次長

1．はじめに（参加希望の動機）

私は、2004年にドイツのケルンで、クラブとケルン体育大学の「ハートスポーツ（心臓リハビリ）」「背骨体操」、シニアフィットネスなどのプログラムを、所属するクラブのスタッフ２人と共に視察したことがある。このとき私はまだボランティアスタッフで、総合型スポーツクラブをよく理解しておらず、ドイツの体育館の形体や、学校が半日制で学校体育という考え方がなく、スポーツはクラブでするものという在り方に非常に驚いたことを覚えている。机上で勉強するものと、実際に目にしたものとの違い、国の政策の違いに新鮮な驚きを感じた。

あれから10年が経ち、私はボランティアから専任スタッフになり、毎日会員を増やすことに追われているなかで、今回の研修を勧められた。日常業務から離れクラブの事をじっくり考えるいい機会になるとも考え、研修に参加することを決めた。

2．事前研修

講師の山本理人氏（北海道教育大学教授）から「ドイツのスポーツ振興・スポーツクラブについて」をテーマとした講義。同じく講師として講義された25年度の派遣団員である斉藤陽子氏のアドバイス。それぞれをしっかりと心に留め、ドイツの研修先であるグレーヴェンブロイヒに旅立った。

3．ドイツ研修

今回の研修ではクラブ関係者、ライン・ノイス

郡副郡長、大学教授、自治体関係者、市や郡のスポーツ連盟事務局長、学校スポーツ委員会事務局長などさまざまな立場の方からドイツのクラブについて講義を受けることが出来た。まず、スポーツをする場所がクラブ（30％以上）だけではなく、民間フィットネス（10％以上）、自分たちで友人と（60％以上）と変わってきている。どの講義でもドイツの課題として①ボランティアが集まらない②財政的な問題③学校の全日制の導入④民間のフィットネス（競争相手）⑤少子高齢化などがあげられていた。日本と違う点では人口の多国籍化がある。その他の問題は日本が直面する課題とあまり変わらないように思えた。課題を解決するために、学校の午後のカリキュラム（スポーツプログラム）にスタッフを派遣したり、高齢者向けの健康志向コースを作ったり、企業にプログラムを提供したりして、その答えは簡単にみつかる訳ではなく、それぞれ各クラブでもっとも適したものを探すしかないのであろうと思われた。その中で郡スポーツ連盟が実施している「体を動かす人は健康に生きられる『動いて健康に過ごそう』」というプログラムや、幼児の時から体を動かそうという「動く幼稚園」、インクルージョン：障がい者も一緒にクラブでスポーツをしよう、「動いて

年を重ねよう」などのプログラムは参考にしたいと思った。

ドイツはスポーツ連盟や行政がプログラムの提供や、指導者の養成、施設の提供などの支援を行い、クラブが実施するという役割分担がはっきり出来ていた。日本では行政がクラブと同じようなプログラムを無料で開催するので、行政がクラブ運営の障害になりかねない。クラブが発展するためには、行政が行うプログラムを受託できるように実力をつけるしかない。

ドイツでは、たくさんの人にクラブの活動に参加してもらうために会費を低くおさえている。そうすると運営が難しくなる。ここでボランティアが提供する役務が重要な鍵となる。いかにボランティアを集めるか、楽しいと感じてもらえるようにするか、また養成するか日本も同様に大きな課題であり、頭を悩ませるところである。

4．みんなが集う場所

「TUSグレーヴェンブロイヒ（サッカー部門）」、「コルシェンブロイヒ（シニア世代のスポーツクラブ）」、「オルケン体操クラブ」の３つのクラブを視察した。どこのクラブにいっても満面の笑顔で出迎えていただき、居心地のいい場所であった。一人ひとりボランティアの役割を紹介していただいた時の彼・彼女らの誇らしい顔は忘れることができない。クラブがボランティアへの感謝を形に表していることは大変勉強になった。また、クラブハウスでビールを飲むことの楽しさは言葉で言い尽くせない。オルケン体操クラブの歓迎の音楽隊の演奏は素晴らしく、お返しに団員で踊った沖縄民謡の「カチャーシー」では、クラブのみなさんもベッカー氏も巻き込み、日本、ドイツの言葉の壁を越え一緒に汗だくになった。このような体験を共有できる場として、絶対にクラブハウスは必要だと強く思った。

初日の講義の時に、この研修のコーディネーターのノイス・ライン郡スポーツ課のアクセル・ベッカー氏が「ドイツではどういう形でクラブに関わるようになるのか、その中でどういった形でボランティア活動をおこなう精神が生まれるのか。」を教えるため自分の経歴を話してくれた。5歳からクラブでサッカーを始め、他のクラブに移るチャンスがなかったわけではないが、青少年部門で代表的なスポークスマンの役割を務めたり、ユース部門での最高責任者の役割を果たしたり特別なものがあった。クラブの中でそういったさまざまな役割を引き受けた。このような体験がベースになってドイツ人のボランティア精神が作られていくということである。ドイツでは幼少時からクラブと関わり、大人になって運営側で支えていく仕組みが長い時間をかけて作られてきた。

私のクラブでもボランティアに来ていた学生たちが教師になって、また教え子を連れて来たり、会員だった子ども達がボランティアとして手伝ってくれるようになったり、少しずつだが形が作られている。これから日本のクラブでも見ることが出来るようになるのではないだろうか。

5．仲間と

事前研修会で初めて全国から集まった13人の団員と顔を合わせた。さまざまな年齢の方がいてバランスのいいチームだったと思う。それぞれの方がそれぞれの立場でいろいろな思いや悩みを持ち、一週間早朝から深夜までぶっ通しで友好を深めた。「これからこれをしよう、あれをしよう！」と熱い思いと前向きな言葉に心が躍った。もちろん、みなさんはトップにいる人たちなので普段クラブでは言えない悩みや愚痴も言い合った。これから、日本全国でクラブを発展させていくために共に動く仲間が出来たことは、この研修の一番の成果かもしれない。

6．その先へ

ドイツも日本も少子高齢化が進み、スポーツの分野だけではなく医療、介護、福祉分野とも結びついてひとつのコミュニティを形成していく必要があるのではないかと感じた。予防とリハビリが高齢化社会のキーワードであり、10年前に視察した「ハートスポーツ（心臓リハビリ）」はしっかり根付いていて、今回訪れた3つのクラブのう

ち２つで行われていた。

今回のドイツ研修で学び、これから私が取り組むべき課題とは、資格を持ち、職業として活動している専門性の高いスタッフによる教室と、スポーツをツールとしてたくさんの人が参加できるコミュニティの場としての教室との二つを融合させたクラブ運営をすること、また、今回の研修で学んだことをクラブ内だけではなく、クラブ作りに関わる大勢の人達と情報を共有する取り組みであると感じた。

ドイツのクラブは様々な困難や時代の変化を受け入れ100年以上存続しているクラブが少なくない。日本ではひとつのクラブが存続し続けるかどうかは非常に長い時間を経なければわからない。事前研修の時に山本理人先生が、「我々は結果をこの目で見ることが出来ない」と言っていたのが強く印象に残っている。今を私たちが頑張れば未来に答えはあるのだろう。

最後にベッカー氏を始め講師の皆様、大原団長を始め全国から集まった団員の皆様、ご尽力いただいた日本体育協会事務局、通訳の多田氏、松尾氏、高橋氏に心から感謝申し上げたい。

団員レポート 4

伊藤　祐美子

あびこ三小健康クラブ
クラブマネジャー

1．海外研修参加にあたって

今からちょうど10年前、体育指導委員（現スポーツ推進委員）だった私は、我孫子市の施策により総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）の母体作りを始めた。初年度、「健康スポーツ講習会」で人を集め、次年度には「三小健康クラブ」(現 「あびこ三小健康クラブ」)を創設。そして１年半後、総合型クラブの設立となった。

それから８年。クラブ創設時15人だったクラブ会員は、100人を超え、活動種目は、３種目から７種目となった。これからのクラブの方向性について考える時期を感じはじめていた。

総合型クラブに関する研修を受けると、度々話題となるドイツのスポーツクラブの話。自分の目で確かめてみたい気持ちは膨らみ、“今後のクラブ運営について何かヒントがあるかもしれない。”そんな思いで今回の研修に参加した。特に、クラブと地域との関係、クラブの運営について関心をもって臨んだのである。

2．クラブ視察から

「TUSグレーヴェンブロイヒ」「コンシェンブロイヒ　シニア世代のスポーツクラブ」「オルケン体操クラブ」の３クラブを訪問した。どのクラブハウスにおいても、クラブの歴史が飾られている雰囲気の中で、ドイツビールを飲みながら、手作りケーキとお茶を飲みながら楽しく語り合ったひとときにクラブハウスの存在価値の高さを実感した。

○「TUSグレーヴェンブロイヒ」

地域にクラブのスポンサーがいる。クラブのサッカーチームが試合をする時、観戦する方々に

手渡すパンフレットの中には、たくさんの広告が載せてあった。地域に応援されている証だ。ドイツでは、スポーツに対するボランティア意識が高く、“参加する”という形の幅が広い。地域からスポンサーをいただくことは、クラブにとって地域に認められる活動をしなければならない。そういうことでお互いの信頼関係を築いているのだろう。

○「コンシェンブロイヒ　シニア世代のスポーツクラブ」

このクラブは、50歳以上の方が入会できるクラブという特徴がある。クラブ会員の中には「クラブが主催する旅行に行くために日々厳しい訓練をしています」と話す方がいたり、運動の他にも、頭の体操や週１回朝食をとりながら、政治や文化の話題に花を咲かせる、等といったように、素晴らしい目的をもった活動をしている。また、このクラブの訪問時に、初めて「ケーゲル」というボーリングに似た種目にチャレンジした。「ケーゲル」にはいろいろな遊び方があり、そんな遊び心が私たちを夢中にさせて大いに盛り上がった。

○「オルケン体操クラブ」

クラブの楽団が演奏で歓迎してくれたことが印象的であった。私たち派遣団も沖縄の踊り「カ

チャーシー」を、クラブのメンバーと一緒に踊った。スポーツだけではない特徴のあるクラブの魅力を感じた。国際交流をした実感が湧いた。交流をすることは、お互いのクラブの利点を知り、活かすことのできる大切の時間である。

クラブにとって、運営スタッフは重要な役目であり、今回訪問したクラブは、いずれもボランティアスタッフで成り立っていた。どのクラブでも役職の紹介をした時、自信に満ちあふれた笑顔で応えるスタッフの皆さんが輝いていた。仕事を持ちながらクラブの運営に携わっているということに、勇気をもらった。また、クラブの愛着が次世代に続く人材の確保につながっていく。クラブの存続には、多世代が好ましいのである。

3．少子高齢化

日本もドイツも少子高齢化という点では共通している。

○高齢者は、健康志向が高く、「健康を維持するために運動が良い」ということはわかっているが、なかなか家から出ない。そのため、ノルトライン＝ヴェストファーレン州スポーツ連盟では、「怠け心」を表すキャラクターを使った啓発ポスターを作っていた。運動することは、予防効果も大きい。誰もが健康で自立した生活を長く続けることを望んでいる。

○子どもたちの発育発達には運動が大切である。身体的な発達の為、人格形成の為にもスポーツをすることが健全な社会形成につながる。

これらの問題の解決に向けて、両国ともにクラブが担っている生涯スポーツ振興の取り組みが今後ますます威力を発揮するだろう。

4．トップダウンからパートナーへ

日本の総合型クラブの多くは、行政主導で設立したクラブ（トップダウン）であり、ドイツは、同じ目的を持った地域住民が自発的に集まってクラブを立ち上げるという住民主導（ボトムアップ）である。ドイツでは、スポーツが社会貢献の場としてとらえられており、プレーするだけでなく様々な角度からスポーツに関わり、社会参加するという国民意識の高さをうらやましく思った。

そのようなドイツであっても、クラブには次のような課題がある。

・政治的な課題　財政面、施設の整備、政策面
・社会的な課題　少子高齢化、時代による志向の変化、学校制度の改革
・クラブの課題　ボランティア、指導者、財政、会員の減少

では、これらの課題に立ち向かう方法はあるのか。

○関係者を一つの席に集め、“どんなことが出来るのか。必要なのか。”を話し合うネットワークを作り上げること。

○同じ課題を抱えているクラブ同士、一緒に協力する。連携する。

ベッカー氏の講義での言葉である。

“人が、地域が、クラブに求めるものは何か”“クラブは何ができるのか”クラブ内外におけるネットワークからは、かかえている課題の解決に結びつくヒントをみつけられるだろう。交流、情報、研修を大切にしよう。協力、連携をしよう。行政主導に頼るのではなく、クラブが取り組みを考え、どこからでも声を上げることができる環境を整えることをはじめよう。

5．今後に向けて

この研修で学んだことは、クラブ運営の未来を考えるうえで大発見とまではいかないが、ヒントとなる考え方を広げることができたと実感している。クラブの次世代への方向性は、少し時間をかけて取り組みたいが、「夢はクラブハウス」の合言葉から「クラブハウスを実現しよう」という気持ちになった。

あびこ三小健康クラブの理念『三小からはじまる三笑　身体が笑う　心が笑う　仲間と笑う』を大切に多くの人が楽しみ、多くの方に親しまれるクラブ作りをめざしたい。

今回の研修にあたって、ドイツで出会った多く

の皆様、通訳くださった方々、日本の関係者の方々に深く感謝申し上げたい。ドイツの空の下で共に過ごした団員の皆様、時間を共有し、各々の団員からも多くのこと学びたくさんの収穫をいただいたことに感謝申し上げたい。今後も総合型クラブに携わる仲間として、それぞれのお立場でご活躍されますことを応援し期待したい。私自身も、クラブをはじめ少しでも多くの人に今回の研修から学んだことを伝えて、役立つ情報の発信に努めていきたい。

団員レポート5

鈴木　功士

総合型地域スポーツクラブ　中原元気クラブ
会長・クラブマネジャー

1．思わぬドイツ行き

暖かな気候になってきた５月下旬。私は「神奈川県からは昨年、城下町スポーツクラブの野田さんが派遣されているから今年は選ばれないだろう。来年ドイツ研修に選ばれるよう、今年は応募だけするか」と呑気に考えながら今回の研修事業への参加申込書を提出した。

６月下旬。その思いを良い意味で裏切る通知が届いた。

海外旅行好きの嫁を説得し、春に産まれた娘を残し、貯金をかき集め、ドイツへ行ける喜びを胸に、慌ただしく準備を始めた。Amazonにてドイツスポーツ関係の書物を買いあさり、大学院時代にお世話になった日本大学の水上先生を訪ね、事前学習を始めた。

８月の事前研修では、日本体育協会（以下、日体協）より、「今回をもってこの研修事業は終了する」との説明を受けた。私はこの幸運に感謝し、チャンスを活かし、たくさん学ぼうと心に誓った。

普段であれは、総合型クラブの会合でご一緒するのは大半の方が人生の大先輩であり、同世代はいないが、今回の研修では私を含め４名の若手が参加していた。事前研修から積極的な姿勢を見せる若手４人衆、特に座間味君の鋭い眼差しと、鋭い意見に刺激を受けた。今回の研修がより一層楽しみになった瞬間だった。

私のクラブは日体協を通じてスポーツ振興くじ（toto）の助成を受けているが、今回の研修の日程が、前年度より１カ月早い10月上旬であり、私のクラブが日体協に提出すべき中間報告書提出締切日（10月８日）間際の渡航日程であった。デュッセルドルフ行きの機内で、なんとか中間報告書が完成し、隣の席にいた若手４人衆の１人、

花輪さんと握手を交わした。これで今回の研修に集中する体制が整った。

私が今回の研修で学びたいテーマは「教育とスポーツ」である。私は、クラブ運営をしながら、大学講師や幼児体育講師を行っている教育者の端くれである。また、クラブとして、地域の小学校体育授業に５年間携わっている。少しではあるが日本の「教育とスポーツ」を経験してきた。私は、日本の学校体育や部活動は優れたシステムだと感じている。ただ、昨今ニュースで取り上げられているように問題点もある。そこで、他の先進国の「教育とスポーツ」がどのようなシステムか学び、日本のスポーツ文化の良さを再発見したいと思い研修に臨んだ。

2．百聞は一見にしかず

「百聞は一見にしかず」まさにこの言葉がドイツ研修にはピッタリであった。

事前学習で、「ドイツでは日本のように、競技スポーツと生涯スポーツに分かれていない」と習った。蓋を開けてみると①競技スポーツ、②健康・フィットネススポーツ、③余暇スポーツ、④体験/冒険/スリルスポーツの４つに分類されて

いた。

私がクラブを設立した当時、「日本のスポーツはボランティアが支えるものになってしまっている。本場のドイツは違う」と聞いていたが、今回のクラブ視察で訪問した３つのクラブは全てボランティアによって支えられていた。資格制度（マイスター制）が浸透しているドイツだが、スポーツ資格で食べていける人は少なく、今回の研修の講師であったTSVバイヤードルマーゲンのヴェルツ氏の様に、スポーツの専門性を活かしプロフェッショナルとして活動している人は少ないようだ。精力的に活動されているヴェルツ氏でさえ、同世代の一般的な職業よりも年収は少ないようだ。

また、私は、ドイツには民間フィットネスクラブがなく、地域クラブがスポーツの全てを担っていると思っていたが、滞在先のグレーヴェンブロイヒの街でさえ、私が見た限り３つの民間フィットネスクラブがあり、大都市であるケルンやデュッセルドルフには日本と変わらない数の民間フィットネスクラブが存在していた。

明け方、グレーヴェンブロイヒの街を朝ジョグしていると、野良猫・野良犬はいないが野良ウサギが街を跳ねていた。デュッセルドルフではライン川沿いを朝ジョグしていると、多くのジョガーとすれ違った。

講師であるリットナー氏によると、スポーツを行う場合の組織形態が近年、多様化しており、クラブで行うのが従来であったが、自分たち、友人と行うジョギングやノルディックウォーキング等の割合が高くなっているとのことであった。また、商業的クラブが社会的な地位を獲得しつつあるようだ。

日本の街中に野良ウサギはあまりいないが、スポーツ文化は日本と同じような状況に近づいていると感じた。これは先進国として共通するものなのだろうか。アメリカやオーストラリアなどに訪れてもっと多くの国のスポーツ文化に触れたいと感じた。

３．ドイツと日本のスポーツ文化やシステム・制度の違い

ドイツのクラブは、フルタイムで勤務している社会人が余暇時間を使用してボランティア運営するのが一般的であった。残業がないドイツの勤労システムがあって成立つものである。TUSグレーヴェンブロイヒでは、保険会社勤務のサッカー部長、広告代理店勤務のサッカー育成部長、電力会社勤務の女子サッカー監督が活躍していた。

ドイツの青少年スポーツは多様な社会人に支えられている。一方、日本では青少年スポーツを担う業種が学校教員に偏っていると感じた。経済協力開発機構は2013年の調査結果で「日本の先生、勤務時間は世界最長」と発表した。学校教員の負担を減らすために、日本の部活動とクラブはもっと協力関係をとるべきだと強く感じた。

また、クラブ視察で訪問したコルシェンブロイヒ・シニア世代クラブが実施していたように、ドイツのクラブでは心臓疾患者向けの医師常駐リハビリプログラムを提供している。更に、医師の診断により、心臓疾患者は保険で教室に参加できる。

日本でもスポーツ庁が設置され、文部科学省や厚生労働省など複数の省庁にまたがるスポーツ行政の関係機構を一本化されれば、クラブが同様のプログラムを提供できる日が来るだろう。クラブからも意見を出し、その準備を進めていく必要がある。

４．田舎だったグレーヴェンブロイヒ

今回の研修プログラムは報告書を見て分かるように、講義やクラブ視察が毎日9時から19時までビッチリ４日間組まれた濃厚なものであった。とても貴重な学びをコーディネートしていただいたベッカー氏には心から感謝したい。研修最終日の夜にベッカー氏から修了証をいただいた時は感無量であった。

私は、４日間の濃厚な研修でドイツについて詳しくなったつもりでいた。しかしそれは本当に「つ

もり」であった。研修翌日のフリープログラムで訪れたケルンとデュッセルドルフは、研修を行っていたグレーヴェンブロイヒとは全く違い、人が多く、ビルは高く、地下鉄や路面電車が走る都会であった。

なかでも一番驚いたのが、FCケルンスタジアムの前で大学を卒業したばかりで４部リーグに所属する日本人選手がサッカーの練習をしている姿である。通訳であり、この日は急遽ツアーコンダクターまで兼任していた松尾氏によると４部リーグでも大卒程度の給与がもらえ、活躍次第では１部リーグへの道が開かれるようだ。それがドイツサッカーなのだと知った。

帰国前日には、松尾氏と共通の知人が数人いることが分かり一気に仲が深まった。そんな松尾氏に案内していただき、地下鉄に乗り、夜のライン川沿いへ向かった。地下鉄を降り地上へ出ると、静まり返ったグレーヴェンブロイヒの夜とは一変、バーのイスが道路を埋める程に敷き詰められ、人で溢れ、活気溢れる景色が広がっていた。バーのテレビではもちろんサッカーが放送されている。人々は、断らないと「おかわり」が出続ける椀子そば式ビールをひたすら飲み続けている。

前から興味が合ったドイツだが、今回の研修でドイツの一部を見ることができ、更に興味が湧いた。もう一度ドイツに学びにくることが私の目標となった。

５．成田行き機内にて思うこと

現在、日本はドイツのスポーツ文化であるクラブのシステムを取り入れ、ドイツは学校制度改革による全日制導入により、学校部活動のシステムを導入しようとしている。両国共に従来のシステムが時代の流れと共に、新たな社会問題を生じ、その解決策として国外の事例を取り入れようとしている。

ドイツを少し見てきた私の勝手な意見だが、今回学んだことを活かし準備をすれば、東京オリンピックを起爆剤として、日本がドイツよりも優れたシステムにたどり着く可能性を感じた。

その準備として、私は総合型クラブと既存クラブのネットワーク構築、総合型クラブに携わる若手ネットワーク構築をしたいと考えている。

まず、総合型クラブと既存クラブのネットワーク構築について。研修で行われたパネルディスカッションでも、クラブの概念が日本側とドイツ側でずれており、最後まで一致することはなかった。ドイツのクラブは、日本の総合型クラブではなく、我々が既存団体と呼び、各所で活動場所の取り合いになってしまっている団体を指すものだと私は理解した。総合型クラブは、それら既存団体こそ、参加者が自発的に行うドイツ流のクラブであることを理解することが重要である。そして、総合型クラブには、それら既存クラブに地域住民が気軽に参加できるインフラを整備する使命があると感じた。

次に、若手ネットワーク構築について。日本でも問題としてあげられる次世代人材の問題、ドイツでもクラブを担う若い人材の不足を感じた。今回の派遣団にいた我々若手４人衆のように、スポーツを通じて社会問題解決に取り組みたい若者はたくさんいると感じている。まずは、この研修を通して団結した若手４人衆を核とし、全国の総合型クラブに携わる若手ネットワークを構築していきたい。

花輪さん、末次さん、座間味君、やりましょう!!

最後に、ドイツ研修を終えて、クラブ会員や学生にこの言葉を伝えている。

「スポーツはやらされるものではなく、自発的に行うものである。」

日本では忘れられがちなスポーツの原点をドイツで感じることができた。

結びに、この機会を与えてくれた全ての方々に感謝いたします。

Danke schön.

団員レポート 6

花輪　和志

アスとれ総合型クラブ
代表

1．はじめに

私は、日本体育協会公認アスレティックトレーナーとして、地元である山梨県甲斐市を拠点に2014年３月『アスとれ総合型クラブ』を設立した。子どもから大人まで、様々な運動遊びを体験できるクラブである。特定のスポーツの技術を習得させるのではなく、身体を動かすことの楽しさを伝えることをテーマとしている。クラブの理念は「スポーツをツールとし、地域に根差した活動を行う中で、精神性・健全な心・頑張る気持ち・連帯感・いたわり・助け合いを育み、クラブとそのメンバーが地域から必要とされ、応援されるクラブを目指す」である。

私が総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）と出会ったのは、2009年、県体育協会主催のアシスタントマネジャー養成講習会である。当時、私は都内から地元山梨に拠点を移し、トレーナーとして地域に貢献できることの可能性を模索していた時期であったので、総合型クラブの素晴らしい理想に感動を覚えた。だが資格取得後、日本の総合型クラブの現状に驚いた。実際多くのクラブは財政的に助成金に頼り、指導スタッフはボランティアベースなど、会費収入もほとんどないようなクラブが多く、私は「今後クラブを維持、存続していくにはどうしていくのだろう？」「このままで地域クラブは発展していけるのだろうか？」と考えるようになった。その後自分達の総合型クラブを設立し、自立に向けてスタートをしたタイミングで今回の研修に参加するチャンスをいただいた。

クラブ先進国であるドイツの歴史あるクラブについて学び、それをクラブや地域に還元し、10年後・50年後も発展していけるクラブづくりをしていきたいと考え今回の研修に参加した。

研修を通じて、ドイツは「（１）スポーツの枠組みを超えた活動」「（２）指導者資格制度」「（３）クラブ愛」に非常に優れており、日本における総合型との違いを実感した。そこでこのレポートではこれらの３点について詳しく述べていきたい。

（１）スポーツの枠組みを超えた活動

ドイツでは、指導者のポテンシャルを最大限に発揮しようとする取り組みが見られた。日本の指導者はスポーツという狭い分野の中でしか活躍できない環境であるのに対し、ドイツでは企業と連携することでその枠組みを超え、スポーツ指導者の可能性を最大限広げようと努力する姿が見られた。その具体例が「Fit for Job」のプログラムである。これはその名の通り「仕事に適合していく」ためのプログラムであり、労働者に対してバイオメカニクスの知識を応用して業務上行われる動作の改善を行うことで効率的に仕事を行えるよう促すものである。これは、労働による怪我（障害）の予防にも繋がる。その背景には国の多大なる経済損失が関係している。講義を行ったヴェルツ氏の話によると、膝痛や腰痛などを原因に55歳以上の労働者の多くが年間３週間～６週間仕事を休

むというデータがあり、年間430億ユーロ（５兆円以上）の損失が生まれているという。莫大な損失である。政府でも労働と健康に対する法律整備が議論されているとのことだが、この問題に独自でアプローチしたのがこのプログラムだという。

プログラムの具体的な例として、重い荷物の持ち上げ動作やフォークリフトへの乗り込み動作の改善方法など具体的な事例が紹介された。その説明の中で、重心移動や、パワーポジション、ニーイン・トゥーアウト（スポーツ障害を起こしやすい膝のアラインメント状態）などと言った具合にスポーツの指導者の観点から、動作分析とその動作の改善の説明を受けた。専門指導者やトレーナーの知識を応用していくことで、新たなニーズの創出、要するに一つのクラブがイノベーターとして新しい分野を切り開いていっているという姿が見受けられた。実際にその効果もでてきており、多数の企業がこの動作改善の採用に乗り出しているという。これは企業との良好な関係作りだけではなく、安定した財源の確保とクラブの発展、そしてスポーツ指導者の新しいあり方を提案することでスポーツ業界全体の発展にとって非常に意味のある事業だと感じられた。そして何より、メンバー（労働者）が良い身体の状態で生活することができ、笑顔にする活動だと感じられた。

（２）指導者資格制度

ドイツでは、全ての競技団体がドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）の傘下に入っており、巨大なピラミッドの構造をしている。スポーツに携わる指導者は、そのような構造の中で指導者資格を取得する形になっているため、全ての指導者がDOSBに属している。日本のように日本体育協会だけでなく他の団体も独自に指導者資格を制定している状況とは根本的に違う点がここにある。ドイツのように統一された組織のもとでライセンスを取得するメリットは大きく２つあると考えられた。

①まずは指導者のレベルの統一が期待できるところである。日本における指導者資格制度は各団体に一任されている。そこに統一された基準はなく、独自の講習会や試験を経て、各団体の裁量でライセンスが発行されていく。資格保持者もその指導レベルは様々であり、必ずしも指導者の質が確保できていないのが現実ではないか。その点、ドイツのように一つの組織が統一された制度のもと資格を発行することで安定した指導者の育成が期待できる。それによって資格自体の価値・信用度が高まっていき、資格保持者がより活躍できる環境が整っていくのだと感じられた。

②指導者のニーズに応じた指導環境が整備できるということである。巨大なピラミッド構造の中で自分が最も適した場所、要するにトップを目指すか、レクリエーションレベルでスポーツの推進を図るのかを、より明確な目的意識を持ちながら活動に励むことができる。特にトップを目指す指導者にとってはオリンピックと言う絶対的な目標が存在するため、トップアスリートの指導をしたいのであれば、各上級ライセンスを取得することができる。このようなキャリアップの道筋もはっきりと示されており、非常にモチベーションを高く保ちながら指導できる環境があるように思えた。

（３）クラブ愛

日本もドイツもクラブ会員がスポーツに「参加する」という点に関しては全く違いがないが、その目的意識がはっきりと違うと感じられた。日本ではクラブや指導者が提供するクラスに参加するという受け身的な会員が多いのに対し、ドイツでは自分達で楽しいクラスを作り出すという主体性が見られた。そもそもドイツではクラブの出発点がコミュニティーベース、要するに会員のニーズを会員自らが形にすることで形成されてきている。そこに新たなコミュニティが発生するため、新たなニーズが生まれてくる。そのニーズが新たな活動を生み出し、クラブに好循環をもたらす構図がドイツにはあった。活動はその地域特有の文化を反映するものも多く、その活動の中で地域性を学び、地域愛を育んでいるのだと感じた。人と人との繋がりがクラブの基盤になっているため、クラブに対する帰属意識も非常に高く、愛やプラ

イドといったクラブの忠誠心を高めるきっかけが多いのが印象的だった。その為、指導者の多くがそのクラブ出身者であることもうなずけた。

2．おわりに

今回の有意義な研修を終えて、改めて自分のクラブと地域を見つめ直すことができた。クラブや地域にはまだまだ多くの有益な財産があり、無限の可能性があることを再認識させられた。スポーツという言葉のイメージにとらわれすぎず、地域コミュニティの拠点となるクラブになっていくこと。その為には、地域からのニーズに答えていける環境作り、人材育成やネットワークづくりを積極的に行っていくことが必要だと考える。10年後・50年後も成長し続けるクラブを目指し、仲間たちと共に一歩一歩前進していきたい。

アスレティックトレーナーというすべての架け橋になれる自らの立場を有効に使い、ドイツ研修で得た貴重な経験を伝え活かし、地域から必要とされるクラブを作っていく事を今後の目標にしたい。

この貴重な研修の機会を与えていただいた日本体育協会事務局をはじめすべての皆様に心から感謝申し上げたい。最後に、本研修に向けて、ご協力いただいた所属クラブのスタッフやメンバーにも深く感謝申し上げたい。

団員レポート 7

杉山　仁夫

総合型地域スポーツクラブ「たんぽぽ」
理事長

1．はじめに

私にとってドイツ訪問は２回目である。１回目は2004年「スポーツ少年団日独同時交流事業」において東海地区４県の青少年８名の引率指導者役を担った時である。その訪独時は、ドイツ国内３カ所を１週間ごとに移動し、各地区で青少年及び指導者との交流を行った。それぞれの活動プログラムを通して、ドイツの青少年や人･文化･自然･スポーツ施設を体験することができた。そして、今回再びドイツで研修する機会に巡りあうことができた。私の知るドイツのスポーツと国民との関わりが10年間でどのように進化したのかその変化に興味があった。また、2020年東京オリンピック・パラリンピック等の開催地としての日本は、どのようにスポーツに関わっていくことがいいのかについての課題や問題。その課題・問題の解決に向かっての総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）としてどのような対応対策が考えられるか。また、どのようなスポーツプログラムが可能なのか。私は、その実践者となるクラブマネージャー・理事長としての立場から、ドイツのような先進国のクラブ組織・運営やスポーツ事情について学べる機会に胸をワクワクして参加した。

2．講義や視察を通して

いつもの講義であれば、学ぼうとする気持ちと体とのバランスが突然崩れ、講義途中で睡眠学習に陥ることもある。しかし、なぜか今回の研修ではどの講義にも終日集中することができた。また、視察したクラブのいずれもが、ドイツならではの特徴が伺える場所で、とても興味を抱かせる所で

もあった。どのプログラムも学ぶ場所や学ぶ内容、講師の魅力からか時差ぼけも意識しないほど集中することができたのではないかと思える。とにかく大変多くを学ぶことができた。その中から特に印象に残った講義３つを選んでここに記述したい。

（1）講義①「社会の発展とスポーツ」

講師より、過去にドイツで出版された雑誌の表紙を見ながら、その時代のニーズに応じてスポーツに求められる役割等が変化していることが紹介された。時代のニーズを取り入れ継続するクラブ運営でなくてはいけないのである。

（2）講義③「企業に対するクラブのオファー」

講師より、企業は「ＨＳＥＱ（Ｈは、ヘルス、Ｓは、セイフティー、Ｅは、環境、Ｑは、クオリティ）」を大切にしているから、自分達のクラブの特徴をしっかり理解して、企業に売り込んで活動することが大切であるとの事例紹介があった。その事例では、クラブが地元企業の従業員に対して、業務中に負担を生じている身体部位の補強や正しい姿勢等の指導を行い、クラブの利益につなげていた。

（3）クラブ視察②「コルシェンブロイヒ　シニア世代スポーツクラブ」

このクラブの会員になれる条件は50歳以上であることであった。クラブの運営にあたっては、会員の多くが自分の専門・興味のあるプログラムを担当する。例えば、バス旅行。会員は旅行を目標にして日々の健康管理に意欲をもってスポーツ活動をしているとのことであった。また、このクラブでは心臓に問題をもつ人たちを対象としたプログラムを行っているが、その参加費用は医師の所見を保険会社へ申請すれば保険でまかなえるシステムらしく参加者は経済的な心配はしなくても気楽に楽しめるようである。

ドイツのクラブでは、ボランティアも運営者の一員であるという考えをもっている。スポーツは自分のためのものであるという立場から、クラブに貢献していることに誇りをもっているとのことである。日本ではクラブの運営者とボランティアで関わる人との意識に違いがあることやボランティアを生かせていないことを改めて確認することができた。

3．総括として

「百聞は一見にしかず」のことわざ通り、スポーツ先進国の現地で視たり聴いたりしたことが自分にとっては一番の研修の場であったと実感している。

（1）日本との違い発見！

①デュッセルドルフ空港に到着して、空港内も空港外周辺にも流れている音楽や宣伝と言った人工的な音がほとんどなく静かな落ち着いた環境を感じた。

②街のレストラン前の路上席では、昼間から楽しくビールを交わしている若者から高齢者まで多くの方を見かけ和みを感じた。

③言葉を交わさなくてもアイコンタクトで何となく飲食や買い物ができるドイツのお店から人間味豊かな温かな風土を感じた。

④健康について意識の高いドイツだと思っていたが…！路上、歩道、公園等での歩きたばこや喫煙、吸い殻が多いことに驚いた。

⑤日本人との体格の違いを見せられた。どこのトイレでも男性用便器の高さは日本の規格とは違い、つま先が疲れるほどの高さだった。（子供用は見当たらなかった。）

⑥クラブがおこなっている健康プログラムは、保険制度での助成があるようである。

（2）一番の収穫は！

日本団として衣食住を共にした仲間との出会いである。日本を離れたドイツ研修であったからこそ強く感じた。仲間から日本の各地の総合型クラブについての情報を得ることができた。このようなことこそ、私にとっては真の価値であったとこのレポートをまとめながら感じている。これを機会にドイツ研修仲間との絆を強めることができるように努力していきたいと強く思っている。

4．最後に

ドイツで通訳をしてくださった。多田様、松尾様、高橋様の３名にはドイツ滞在中の安心・安全をいただきました。紙面をもってお礼をさせていただきます。「誠にありがとうございました。」

団員レポート 8

高橋　利博

エスペランサ可茂スポーツクラブ
理事長・クラブマネジャー

1．ドイツ研修への参加動機

私は、2000年７月にボランティア組織の少年サッカークラブを創設し、2008年まで活動してきたが、ビジョンがなくこのクラブをどう発展させるのか、五里霧中の状態であった。2009年に日本サッカー協会のスポーツマネジャーズカレッジ本講座に出席し、そこで行われた事業計画書作成を目標に取り組んだ研修において、ミッション・ビジョンを持つ事やクラブのマネージメントの大切さを学んだ。サッカーをやっていた関係で、ドイツのスポーツクラブには興味があり、スポーツクラブの内実を勉強したいという希望は強く持っていた。

「ドイツのスポーツクラブは、何を大切にして活動を行っているのだろう？」「環境の違いがあるのは当然だが、具体的にはどの様な運営を行っているのだろう？」「日本の自分たちのクラブを大きくさせる際には、何を大切にしなければならないだろう？」など知りたい部分が多くあった。

2．レクチャーの中から学んだこと

講義において、数年前からドイツの学校制度に変化があり、クラブの運営も変わらざるを得ない状況が報告された。従前の授業は午前中のみだったが、制度変更により生徒は午後４時半くらいまで学校で生活しなければならない日もあるそうだ。このため、クラブにおけるスポーツ活動は、開始時間が夕方になるので、この状況は日本とよく似てきた。ただし、ドイツの場合は、学校とクラブが連携をとり、クラブが学校のカリキュラムに入り込んで活動できているところは全く日本と

違う。

日本でもこのような方式ができれば、体育が苦手な生徒に対して専門的な知識と経験をもったスポーツクラブの指導者が指導することが可能になり、現場の教職員、特に経験の少ない女性や、高齢の教職員の方々の手助けになるだろう。ただそのためには、長い時間をかけた、指導者の養成も必要になる。

ドイツでは、システムとして学校教育の中にスポーツクラブの指導者が参画していく状態がつくられている。今後は、才能あるスポーツ競技者を育てる学校と生徒が楽しくスポーツに親しむ学校に分化していくと思われるが、楽しくスポーツに親しめる環境を作ることが前提に進んでいるようで羨ましい。例えば、具体的なプログラムは、先生・保護者・生徒の三者で会議を行い、内容を決めるとのことだった。これなら、子どもたち保護者も共に納得するだろう。

今回の研修で新しい試みとして行われた、パネルディスカッションでは、意見をストップさせずに自由に討論することができたら、より有意義なものになったのではないだろうか。その点は至極残念であった。ドイツのように、日本でも文化としてのスポーツ、つまり地域の個々人が「いつで

も、どこでも、いつまでも」できる環境を作る必要がある。行政は、ドイツのように施設をクラブに提供し、クラブは、スポーツプログラムを地域住民に提供するシステムを考えなければならない。今回のパネルディスカッションにおいて、知恵を出して議論すれば、課題解決のヒントが生まれる可能性があったのではないかと思う。

3．ドイツでのスポーツクラブ訪問から得た事

（1）ＴＵＳグレーヴェンブロイヒ（サッカー部門）

このクラブは、市から芝生のサッカー場等を提供してもらっていた。サッカー部門の責任者は、保険会社に勤務する傍らボランティアでこの伝統（約100年前に創立）あるクラブを運営している。ここにかかわる、殆どの人は、ボランティアで運営しているとのことだったが、その他のスタッフもほとんどがボランティアであった。

私の関心事の大きなテーマであった指導者の確保について重要な意見をこのクラブにてもらった。「指導者にどんな人を選ぶか？」との私の質問に、サッカー部門の責任者は、「指導技術の高さだけではなく、子どもに愛情を注げる人を選ぶ。いくら指導技術が高くても子どもに愛情を注げない指導者ではだめ」と答えてくれた。とかく、日本の場合は、クラブの価値を高めるために勝利至上主義になる町クラブが多く、子どもをその道具にしているケースが多々見られる。学問とスポーツの両立と片方で言いながら、実際のところは「勝利至上主義」になっていて、民主的人格を備えた人間の育成という観点に立てていない場合が多い。

私はこのクラブ訪問において、子どもを人間に育てる哲学を持つことの重要性を認識させられたし、子どもに対する希望の根源に「愛情」「愛おしさ」の深い部分の一端をつかむことができた。

（2）シニア世代のクラブ

シニア世代の要求は何かと考えながらの視察であった。

会員の旅行プログラムには、期間だけでも12日間、１泊２日、日帰り等、多彩に用意されており、楽しさ仲間づくりの方法として、私のクラブの運営にも参考になった。また、クラブ役員からの説明において「ドイツで高齢者は孤立している」との現状認識の話があった。このことを考えると、如何に高齢者と高齢者を繋ぐ活動が大切か。その中で、高齢者にある「重荷」をみんなで共有していけるかという課題に突き当たるように感じている。

クラブ紹介の後に役員に連れられて楽しんだドイツ式ボーリング「ケーゲル」は、楽しさをつくるスポーツで、高齢者向きである事は間違いない。また、クラブハウス、ケーゲル場ともに飲食のできる場所があり、豪華であった。クラブ会員がゆったりし、ゆっくりした時間の中に会話が生まれる環境を保持していた。

（3）オルケン体操クラブ

このクラブは、人工芝サッカー場・体操場・筋力トレーニング施設などをクラブ自身が保有しており、実に豪華であった。また、創設が1896年という大変伝統あるクラブであった。私が一番強く感じたのは、この伝統あるクラブを「皆が愛している」ということだった。そのことは、このクラブが自らのブラスバンドを持っていることから理解できた。我々を歓迎するために、クラブハウスでの懇親会の席上、ブラスバンドの演奏が披露されたが、楽しそうに演奏しているクラブ会員の人達の姿は、実に晴れ晴れとしていて、このクラブの伝統とそこから生まれる愛着の深さを感じ取ることができた。自分たちのクラブに何ができるかを考えたら、一つの答えは「絆」を具体的につくる教室・コースを作る事であると感じた。実に示唆に富むものであった。

4．まとめ

今回の研修に参加できたことは、今後、私のクラブのビジョン・マネージメント・近隣クラブとの連携作りに大きく役立っていくものと考える。

日本において、地域住民が主体となってクラブを運営していくには、まだまだ多くの障害がある。人材、資金、施設の確保など、いずれも不十分な中での活動である。しかし、指導者の情熱、運営

委員会における意識づくりは、程度の差こそあれ、「ドイツのクラブでの仲間意識や絆、愛情」に負けないものができるかもしれない。私たちが、真に住民を主体としたクラブづくりを考え、高齢者や子どもの幸せ・希望を育てる活動ができれば、ドイツに負けないクラブが作れるものと確信する。

高齢者や、子どもを孤立させない。そのための文化・スポーツ活動づくりに、ドイツのスポーツクラブ活動から多くを学ばなくてはならない。行政との連携は非常に重要である。

研修期間中は、毎朝、ホテルから15分間程度歩いて研修会場であるライン・ノイス郡の庁舎へ向かい、講義終了後にはまた、庁舎からホテルへ帰ってくる日々だった。

通りには、靴を打っている店、パン屋さん、衣料品、花屋さん、化粧品店など立派な商店が並んだ商店街があった。クラブは、地域の人々のコミュニケーションづくりという一側面を持っている。日本は、商店街がシャッター通りになり、コミュニケーションのある町と言えない状況が進んでいるのが実状である。

ドイツの街を歩きながら、クラブを通じた「街の賑わい」を日本の街中に、以前の「活気ある街」を取り戻したいと感じた。

団員レポート 9

大橋　寛治

NPO 法人アザックとよさと
副代表

1．ドイツ研修に参加した理由

我が国の総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）は、ドイツがモデルになっていると言われている。私が過去に受けた研修では、バーカウンターがあるクラブハウスや緑に囲まれた観客席のあるグラウンドなど、ドイツのクラブの様子がスライドに映し出され、「我々が目指すべき姿」として紹介された。スライドの写真と日本の総合型クラブの現実とを対比したとき、「国民性が違う」「スポーツを取り巻く環境が違う」等の理由から、ドイツの方法がそのまま日本で通用するとは思えないと心の中で安易に片づけ、自分自身がドイツを訪れることは諦めていたが、「スポーツという身体行為において『国民性』なるものが果たしてどれほどの影響を及ぼすのか」「ドイツと日本のクラブは何が違うのか」という疑問に関する答えを見つけるために、私はドイツ研修を志願した。

2．ドイツの凄いところ

研修の中で感じたドイツの凄いところが３つある。

まず１点目は、ドイツのクラブは100年以上の永い歴史があることだ。私たちが訪問したライン・ノイス郡では、1903年に体操を中心としたクラブが設立されており、1900年代にはクラブでスポーツを楽しむ様子が写真に収められている。クラブは永い歳月をかけて地域住民に愛され、地域住民により育てられてきた。

２点目は、ドイツ国内には約90,000ものクラブが存在することだ。90,000という数字がどの程度のものであるか、即座に理解することはできなかったが、研修で紹介されたコンシェンブロイヒ市の場合、人口33,000人のまちに33のクラブがある。自身のまちに置き換えると如何にドイツにクラブが多いかが理解でき、地域住民にとってクラブが身近な存在であることは当然のように思える。

３点目は、住民の約30％がクラブに会員として加入していることである。クラブはスポーツを楽しむだけの場所でなく、交流の場としても存在し、地域住民一人ひとりを繋いでいる。

クラブは100年の歳月をかけ地域住民から信頼され愛される存在に成熟し、それが、行政や企業などの地域を取り巻く組織との良好な関係を築くことにも繋がった。また、公共スポーツ施設の利用について、地元クラブが最優先されていることもクラブが地域社会に浸透していていることの証と言える。

3．クラブへの期待

ドイツでは、クラブが地域社会に深く関わっていることから、クラブへの期待も大きい。

例えば、青少年がクラブでスポーツに親しむことは、非行の防止に繋がり、クラブが青少年の健

全育成に一翼を担うことが期待されている。

研修では、企業の従業員の健康管理を担っているクラブも紹介された。そこでは、作業現場における作業員の姿勢や動作から、作業が及ぼす身体への負担を分析し、作業動作を改善することで腰痛や関節症などの予防に繋げている。企業はクラブに対して従業員の健康管理を目的として投資し、クラブは健康管理に努めることで、医療費の削減に繋げている。日本の企業内にある健康管理室や安全衛生委員会などに相当する労働衛生機構を備えた総合健康管理体制を、クラブと企業が連携して構築している。クラブの中には、リハビリクリニックを開設し、高血圧症や糖尿病疾患者に対し、運動療法の提供をおこなっているところもあった。

さらに、学校との連携も図られており、クラブの協力なしでは学校の体育授業は成り立たないとまで言われている。例えばノルトライン＝ヴェストファーレン州では、３年前から学校が全日制となったため、クラブは午後の時間帯に学校へ出向いて運動に関するプログラムの提供などを行っている。

以上のように、ドイツのクラブは、青少年の健全育成、疾病予防・医療費削減、学校へのプログラム提供など、地域社会の将来に大きく影響する重要な役割を担っている。

４．ドイツが抱える課題

ドイツは日本に次いで少子高齢化が進んでおり、子どもの数が年々減少するなかで、スポーツをしない子どもが増加している。また、生活習慣病の子どもが増加していることも、深刻な社会問題となっている。講師の一人は、運動不足が生活習慣病に繋がることから、「ドイツの子どもたちのスポーツ離れは日本のせいだ」とゲーム先進国である日本を非難した。また、この講師は高齢者人口が増加傾向にあるという現状に社会が対応できていないことについても指摘した。高齢者の生活保障は行政が担うべきところであるが、健康増進や生き甲斐づくりについては、クラブの役割でもある。現在ドイツでは､行政とクラブが連携し、広報などにより高齢者のクラブ参加を促進するように努めている。

また、ドイツのクラブが抱える課題として、指導者不足も挙げられていた。州スポーツ連盟は指導者育成にも重点をおき、充実した養成カリキュラムを設けているが、指導者のなり手がいないことが問題となっている。指導者も含めたボランティアの確保として、単一事業のみにボランティア協力を仰ぎ、「短く終える」ことによりボランティアの負担を少しでも軽減しようという考え方への転換を試みている。

以上のように、ドイツ社会が抱える問題は、日本と類似点がある。100年以上の歴史あるクラブが、今後どのように問題に取り組み、解決に繋げるかに着目したい。

５．知りたかったこと

私は、以前から障がい者のクラブ参加については興味があった。ドイツでは空港など多くの人々が集まる場所やホテル、店舗、レストランは、バリアフリーが徹底されており、バスや電車などの公共交通機関は、障がい者が乗り降りし易い車両構造になっている。デュッセルドルフ市内を電車で移動する機会があったが、確かに車輌乗車口とホームに段差はなく、車イスでも難なく乗車できる構造であった。日本に比べ、ドイツは障がい者が生活し易い環境であるが、一方で障がい者のクラブ参加については、ドイツでもまだ進んでいないというのが現状であった。障がい者のクラブ参加に向けたアプローチの検討を進めていくことは、今後の課題となっている。

ドイツにおけるクラブと行政の関係についても、関心があった。ドイツではクラブに関わる行政の役割は、「情報とアイデアの提供」となっており、クラブを指導、育成することではない。その理由は、クラブが100年以上の永い歴史で成熟し、住民の30%がクラブに加入するなど地域に深く浸透したことで、社会のなかでの立場が確立され、更に成長を遂げていることにある。ドイツでは、クラブと行政の関係は、スポーツ推進におけるパートナーとなっている。

6．研修を終えて

研修を終えて感じたことが２つある。

まず、ドイツと日本とでは、クラブの歴史に違いがあることである。ドイツには100年以上の歴史があるのに対し、日本は僅かに20年の歴史しかない。それは、ドイツと日本におけるサッカーの歴史に似ている。1900年にドイツサッカー連盟が創設され、現代まで世界のサッカー界を牽引してきたが、日本は1993年にプロサッカーリーグがスタートし、まだ20年余りに過ぎない。サッカー界において、ドイツが日本に比べ組織体も、技術も、育成力も優れているように、日本のクラブは、人間の成長に例えるならば、幼児期に過ぎないことを実感した。また、ドイツのクラブは、ただ歳月を積み重ねてきただけでなく、住民主導で運営されてきたことで、クラブはより地域に浸透し社会から信頼される存在となった。

２点目は、ドイツではクラブを取り巻く様々な組織や団体と手を組み、強固な絆と互いの均等な力配分により、揺らぐことのないバランスを維持していることである。行政や企業、学校との関わりについて、講義のなかで「パートナー」「ネットワーク」という言葉をよく耳にした。この絶妙なバランスは、パートナーへの信頼と期待がなせる業である。地域住民がクラブを育てたように、良きパートナーもクラブが育つうえでかけがえのない存在である。

今後、ドイツのスポーツクラブを例に「我々が目指すべき姿」を考える際には、私たちは国民性や環境の違いを理由に、その実現を諦めてはいけない。しかし、ドイツのクラブをそのまま真似るのではなく、地域住民が主体となり地域スポーツの推進に努め、永い歳月をかけクラブを少しずつ地域に浸透させてきたドイツのプロセスを伝えていくことが必要である。「ビールの国」ドイツでは、それぞれのまちにビールが生まれ、地域住民により育てられた。ビールはそのまちの自慢であり誇りである。クラブも、また、地域住民にとって自慢であり誇りである。100年後、日本の総合型クラブがまちの自慢であり誇りとなることを目指したい。私たちは、まだ幼く、歩み始めたばかりだから。

最後に、ドイツでお世話になったライン・ノイス郡スポーツ相談課長のアクセル･ベッカーさん、通訳の多田茂さん、松尾喜文さん、高橋範子さんに心から感謝申し上げる。

団員レポート10

末次　輝大

ＮＰＯ法人網野スポーツクラブ
クラブマネジャー

1．はじめに

本研修事業には、平成23年度に私が所属しているクラブから参加した者がおり、その報告会でドイツの地域スポーツクラブとはどんなものなのか少しは知ることができた。しかし、当時の私はクラブ内でもサッカー指導者でしかなく、「へえードイツってそうなんだ」程度にしか思っていなかった。

翌年４月よりクラブマネジャーとして従事するようになり、クラブ運営を任されるようになったことで、それまでは知ることがなかった行政との関わり・学校との関わり・地元企業との関わり・地元住民との関わり・他団体との関わりの重要性と難しさ知ることができた。クラブが自立していくためにも各団体との関わりはとても重要で、そのあり方がクラブにとっても課題となっていた。私が今回この研修事業に応募したひとつの動機は、地域スポーツクラブの先進国ドイツでは、各団体とどのような関わり方・アプローチの仕方をしているのか知りたくなったからである。

そしてもうひとつの理由は、私が現在29歳であり、20代の最後の時間を過ごしているということにある。29歳の誕生日を迎えた日、30歳に向けたこの１年間は「いろんなことを学ぶ年にしよう。そのためには外に出ていろんなものを自分の目･耳･感性で感じよう」と決めていたのである。

ドイツに行けると決まってからはスポーツだけではなく、ドイツという国の文化や歴史も知りたいと思うようになった。それからは出発の日が待ち遠しく日々を過ごしていた。

2．講義を受けて

（1）ドイツスポーツクラブとの比較

ドイツにおけるスポーツクラブの始まりは体操クラブで、参加するのは男性が主流であり、女性は少なかったが、時代が経過することともにスポーツ対する考え方が変わった。具体的には、「規律・統一性」を重視していた時代から「楽しさ重視」、「健康意識の高まり」、「自分自身の体型意識」、「チャレンジ精神」へ、トレンドが時代によって変化するのと軌を一にしてスポーツは形を変えてきた。では日本のスポーツはどのように変化してきたのだろう。

日本では今、ウォーキングやランニングが流行っていることを考えると、その理由は将来の健康のためであったり、体型維持のためと考えられる。またドイツも日本も少子高齢化という社会全体の問題があり、クラブにとっても大きな問題である。私のクラブも少子高齢化が著しく進んでいる地域で活動しており、既存のプログラムだけをやっていては会員さんに満足してもらえないようになってくるだろうし、会員数も減少していくであろう。常にニーズを把握しそれに合ったプログラムを作成し続けなければと感じた。そのためにはクラブマネジャーである自分をはじめ、スタッフ一人ひとりのレベルアップとスタッフ間での連

携が必要になってくると強く思う。ドイツでは日本より専門的な指導者育成がなされているようだ。専門的な技術と知識を得るために、様々な分野の指導者講習会がクラブの上部団体にあたる郡スポーツ連盟主催で行われている。日本でも様々な講習会があるものの、会場は東京など都心部が中心で、なかなか私のクラブの地域からは距離的に参加が難しいのが現状である。

ただし、講習会に参加できないことを理由にしては、この先の成長は望めないので、他クラブとの交流により情報交換を行い、そこで得た情報もしっかりとスタッフ間で共有しさらに自分たちのクラブに合った取り組みに変えていくためにミーティングをするということが必要があると思っている。自己満足にならず、常に質を追求しながら取り組むことでより良いプログラムが出来上がるだろうし、スタッフのレベルも上がってくると思う。

また、クラブに加入している会員さんのニーズに応えることも重要だが、新規会員をどうやって取り込むかも課題になっている。特に20代～50代の男女の加入数が少ないのが私のクラブの現状であり、ドイツでも同じ課題を持っているのがわかった。この問題を解決するためにドイツではどんな取り組みをしているのか興味があったが、具体的な話を聞けず残念であった。他にもボランティアのなり手が少なくなっているという問題もドイツと同様にあるが、私のクラブに関して言えば、人口が減っていく中でボランティアを増やしていくことは難しく、まずはスタッフのレベルアップが必要であると感じた。

（2）行政との関わり

一番に感じたことが日本とドイツでの文化の違いである。ドイツはスポーツが文化になっており、それに比べて日本はスポーツが文化になるように進めている段階ではないだろうか。日本がドイツのやり方をそのまま真似ても、クラブ数がドイツの様に増えたり繁栄したりすることはないだろう。

まずは日本でスポーツが文化になる取り組みが必要であり、その取り組みの先頭を走るのが総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）であると私は思う。ただ、総合型クラブは、こうあるべきという画一的なものではなく、地域の特性を生かし地域に合ったものでなくてはスポーツが文化にはなり得ない。様々な地域で様々なスポーツの在り方があることで文化になってくると思う。総合型クラブが国主導で広まり20年になり、少しずつ総合型クラブは増えてきたが、まだまだ自立できてないクラブが多いと感じる。財政面はもちろんだが、人材の確保と専門的な技術と知識を持った指導者が不足していることも各クラブが抱えている問題だと思う。前述したが、指導者資格を取るのには時間とお金がかかるため、なかなか講習会を受けることができない。国や地方行政には指導者養成の面での整備をお願いしたいし、各体育・スポーツ協会には指導者を増やすためにもう少し講習会の回数や場所を拡充されることを願いたい。各競技で世界一を目指すのであれば、日本でスポーツが文化になることは必須だと思う。

（3）学校との関わり

ドイツでは数年前より学校の全日制が始まり、スポーツをする機会が減っているという現象が起きていたり、スポーツクラブに加入する子供たちが減ってきている。スポーツ先進国が日本のようなスポーツ発展途上国（私自身はそう思っている）の学校システムなってきているのには疑問が残った。ただ、ドイツのスポーツ界はこの制度変更を危機と捉え、クラブの存続をかけて学校に出向き連携を図り、新たなクラブの在り方を見つけ出そうとしているのがわかった。学校も積極的にスポーツへの取り組みを考えており、ただ単にスポーツをするのではなく、子供の特徴に合わせ、生涯スポーツ・競技スポーツ・矯正運動とグループ分けをしている。日本でスポーツと言えば競技スポーツが主流であり、だれもがスポーツをできるような環境が整備されていないこともスポーツが文化になっていない一因かもしれないと感じた。ドイツのように学校と外部との連携が日本では取りにくいと感じる。行政・学校・スポーツクラブが三位一体となり子供たちの未来の為に、地

域の未来の為に手を取り合う必要があると思う。お互いが待つだけではなく、どんどん出向き情報交換をしどうすれば良いのかを検討していくことが今後の目標ではないかと思う。

3．クラブを訪問して

今回の研修で訪問した３つのクラブに共通して感じたことは、クラブに係る一人ひとりが自分のクラブを愛し、クラブ発展のために動き、その活動を思い切り楽しんでいたことである。このようなクラブであることが憧れであり私の目標である。そのためにはクラブ会員の皆さんに自分のクラブと想ってもらうことが一番で、皆でクラブ運営をしているという意識が必要であり、そのためには風通しを良くして会員さんの意見要望を聞きだし、それを形にしていく作業がクラブマネジャーである私に求められている仕事なのだと思う。

時間があればクラブに行こう、今日はクラブに行って過ごそうと思える場所作りも必要である。現にドイツでそんなクラブに出会えたことで、その思いはますます強くなった。

4．最後に

今回でこの研修事業は終了するということだが、その最後の機会に参加できたことを大変ありがたく思っている。快く送り出して頂いたクラブの会長をはじめスタッフの皆さんには感謝の言葉しかない。また、同じ志を持ってこの研修を共に受講し、時間を過ごした団員の皆さんに出会えたことが最大の財産と成果である。

私自身はこれで終わりではなく、ここからが始まりである。ドイツで得たことを自分のクラブ流にアレンジし、クラブが今後発展しくためにこれからも日々学ぶことをやめず、進み続けていきたい。

団員レポート 11

田村　泰啓

スポーツクラブ 21 しかま
理事長

1．はじめに

私が所属する「スポーツクラブ21しかま」は、2004年に立ち上がった兵庫県姫路市で活動しているクラブで、現在の会員数は約370名である。私はいつか憧れのドイツを訪れ、本物のクラブの存在をこの目で確かめたいと、総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）のマネジメントにかかわり始めた頃から思っていた。クラブが設立されて11年目、私がクラブ理事としての事務局入りから数えると９年目を迎えるが、その間、一貫してクラブ運営に関わってきた。様々なクラブの運営形態を知りたいと思い始めた時に、今回のドイツ研修のチャンスは巡って来た。しかも今回が最後の派遣団という大変重要な任務をいただいた事に感謝している。

現在は、兵庫県姫路市スポーツ推進委員の立場と、総合型クラブを運営する理事長の立場で、常に理想と現実、そして疑問の中で、スポーツ振興とクラブ運営に携わってきた。「ドイツが総合型クラブの先進国」ということを、ビデオや写真からの情報でしか得ることができないまま、「スポーツとは何か、総合型クラブができることは何か」今一度初心に帰り、50年、100年と歴史を積み重ねてきたドイツのクラブを視察することで、新たな展開が見えるのではないか、又「ドイツのスポーツ文化と日本のスポーツ文化の違いは何か」という疑問を抱きながら、私は今回の研修に参加した。

2．ドイツ研修に参加して

○ドイツのスポーツクラブの歴史と現状

今回の研修では、９つの講義を受け、３つのクラブを視察させていただいた。長い歴史の中で培われたドイツのスポーツクラブは、法律にも保障され、地域を中心に広まっており、100年以上の歴史と伝統を持つクラブがあるなど、ドイツ国民のスポーツの普及と発展に尽くしてきた。ドイツでは、「スポーツを通じた町づくり・文化コミュニティの確立」また「スポーツはクラブで学ぶもの」という社会通念が、クラブの根底に流れていた。

また、ドイツには、約９万のクラブがあり、国民のおよそ４人に１人はどこかの地域のクラブに入ってスポーツを楽しんでいる。地域の公共性を重視して活動し、スポーツを生活の一部分として楽しんでおり、会員が自主的に活動し、会員の自由意思に基づいて運営している。また、各自の余暇時間を活用して無償でクラブの運営や指導に当たるなど、ボランティアの存在が大変重要な意味を持ち、ボランティアがドイツのクラブの柱となっていた。そして活動の拠点であるクラブハウスがあり、会員の交流の場になるなど、地域の人々のコミュニティの場として非常に大きな役割を担っていた。

○ドイツのクラブライフ

今回は内容が異なる３つのクラブを視察させていただいた。

TUSグレーヴェンブロイヒは、大きなサッカー場があり、クラブハウスには多数のトロフィーや、壁一面には写真やペナントが飾られ、歴史と伝統の重みを感じた。またビールサーバーが付いたカウンターがあり、クラブライフとクラブ収益を兼ねて、クラブがスポーツのみを提供する組織ではないことを強く感じた。

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブでは、高齢者自らがクラブ運営を行っており、高齢者が助け合い地域に根ざした活動をされ、理事もそれぞれ明確な役割があり居場所がしっかりと確立されていた。ケーゲル（ドイツボウリング）ができる施設にもレストランが併設され仲間が集まって食事をとることができ、我々もその施設で飲んだり食べたりボールを投げたりとクラブの理事たちと楽しい時間を過ごした。

オルケン体操クラブは、体操クラブでありながら人工芝のサッカーグラウンドやビーチバレーコートが整備されており、歴史のある凄いスポーツクラブであった。中でも大小体育館の間に上下に可動する床があり、舞台やホールとしても使えるなどよく考えた造りで、すべてクラブ会員の手作りという事に驚かされた。クラブハウスも充実しており、ここでもビールサーバー付きカウンターがありコミュニケーションの場となっていた。視察後の懇親会では、理事の方々がそのカウンターで食事を用意してくださったり、クラブ会員で編成されたブラスバンド演奏の他、踊ったり、歌ったりと楽しめる交流の場となっていた。それぞれの世代が、それぞれの立場でクラブライフを楽しんでいた。

また名誉会員の立場で、情熱を持った理事長や理事たちがクラブに誇りと愛着を持ち、メンバーを支えクラブ運営をされている。ドイツのクラブライフとメンバーシップの重要性が見えてきた。

どのクラブも地域の人たちが自分たちの地域の為に運営しているクラブという意識が強く感じられた。基本的に会費は安く設定されており、月10ユーロ以下で参加出来るクラブがほとんどであった。ドイツのクラブの多くは、ボランティアベースで運営が行われていた。実際、ドイツのクラブは会員300名程度の規模が大半であり、話によると専任の職員を雇うには2,500名以上の会員が必要となってくるだろうとのことであった。

クラブの運営に対しては、州や郡、市町村から助成金が出ているが、額は年々減少している。しかし、クラブにとって一番身近な行政である市町村からはスポーツ施設の利用において大きな支援を受けている。その内容としては、無償もしくは安価（年間数ユーロ程度）で市のスポーツ施設を利用できる、施設そのものを優先的に長期に渡って借用する権利が与えられる等である。そのため、多くのクラブは市のスポーツ施設を用いて、クラブ活動を展開している。スポーツ施設に関しては、行政から大きな支援を受けているが、多くのクラブでは日本の総合型クラブと同様、財政面や人的資源（ボランティア、優秀な指導者の確保）の問題など、今後のクラブ運営に関して課題を抱えていることが理解できた。

3．研修後の活動について

私のクラブが今後も地域に必要な存在として「地域になくてはならないクラブ」となる為には、ドイツのクラブに学ぶべき部分が多くあり、地域におけるクラブの役割（社会的使命）を日本の総合型クラブも改めて考えていく必要があるのではないかと思う。

現在、兵庫県内では約800の総合型クラブが設立され活動をしている。今後、これらのクラブがスポーツの分野だけではなく、地域における総合型クラブの役割（社会的使命）を担った、本当の意味で「地域になくてはならないクラブ」となっていければ、100年続くクラブとなる可能性を秘めている。今後、本事業に関わった人々がネットワークを構築し日本及びドイツのクラブの発展に繋がるように、全国の仲間と共に頑張っていきたい。この出逢いを次に繋げることが新たなミッションでもあり、この研修の成果をまとめることが重要なことだと感じている。

4．終わりに

団長をはじめ全国から参加された団員の皆さん、ドイツでの通訳の多田さん、松尾さん、高橋さん､担当して下さった日本体育協会の加藤さん。そしてアクセル・ベッカー氏と講師の皆さん、多くの方に大変お世話になった。研修内容も、人も全て私の素晴らしい財産となった。心から感謝申し上げたい。

団員レポート 12

浅井　増雄

NPO 法人 WillDo
副理事長

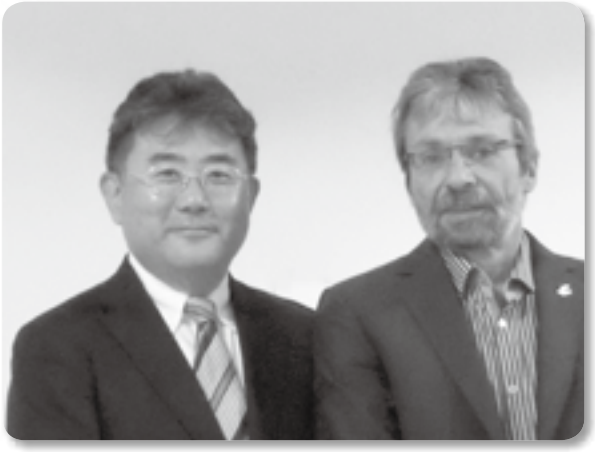
1．はじめに

今回の視察研修にあたって、私が一番見たいと思ったことはドイツのクラブを取り巻く社会環境、社会システム、風土ならびに人々の心情であった。なぜドイツには100年以上続くクラブがあるのか、なぜクラブの加入率が人口の30％を超えるのか、何が日本と違うのか、その背景が知りたいと思った。事前研修会での講義を受け、前年のレポートを読み、「ドイツに学ぶ地方自治体のスポーツ政策」「スポーツ・コモンズ」などの本も読んだ。またインターネットでドイツのクラブに関するコンテンツも探した。その結果、ある程度のクラブ像を自分なりに持つことができたと考えていた。

2．日独の違い

日本を出発し、デュッセルドルフが近づき、飛行機が高度を下げて雲から抜けだした時に広がっていたのは、山がなく広大な畑と森が広がる大地であった。その中に街や集落が点在し、火力発電所がある風景であった。実際に、空港を出てアウトバーンを走り宿泊先であるグレーヴェンブロイヒに向かう車中での風景は、北海道にでも来たような錯覚を覚えた。街中は私が住む佐世保にあるハウステンボスの風景そのままであり懐かしささえ覚えた（ハウステンボスはオランダの街並みを再現しているのだから当たり前ではあるのだが）。このようにして私の研修が始まった。

翌日から研修が始まり講義を受け質疑を交わしていく中で、どうも議論がかみ合っていない感覚が強くなってきた。いくら質問してもなかなか腑に落ちるような回答が返ってこない、そのような



印象を受けた。その理由は日独の前提条件、社会システム、語句の定義の違いである。例えば、鹿児島で「酒」を注文すると日本酒ではなく焼酎が運ばれてくる。このような違いである。この感覚は最後まで続いた。

まず行政の形が違う。頭では理解しているが、連邦政府という国の考え方がピンとこない。日本でいえば徳川幕府が連藩政府になっていると考えた方が分かりやすい。当然州の力、権限は大きく、州によって制度、風習も違う。日本の国～市区町村という中央集権的な頭で理解しようとするとついていけなくなる。

他に例を挙げると、まずドイツにおけるクラブの定義であろう。ドイツでは単一種目のクラブが多い。公共の体育館はクラブしか使用することができず、したがって日本のように趣味のサークル活動を目的に借りることは原則的にできない（日本では場所の取り合いをやっているが）。クラブは必ず地区のスポーツ連盟、競技連盟に登録している。また、ドイツは残業を原則的にしない社会である。その結果、夕方には家族がそろう時間がある。町内会、公民館などといった地域の集団はない。その結果、クラブというコミュニティーの必要性が高まる。学校は半日型から全日制に移行

しつつあるが、強制ではない。学校単位でどのようにするか決めることができる（これが日本であれば、文科省の方針に対し、県レベルで指針が示され、市区町村教育委員会単位で判断し実施するという図になるはずである）。

小中高大での学校部活はなく実業団スポーツもない（日本の学校運動部活動、実業団、スポーツ少年団、スポーツサークルなどを合算したら、ドイツのクラブの数を超えるのではないか）。

また、ドイツは資格というものを非常に重視する社会である。誰でもパン屋さんになれるわけではないのである。当然ながらスポーツ指導者に対しても驚くほどの講習を受けた者にしか資格が与えられない。

その他にも違和感を持った事柄はあるのだが、要するにドイツ人が「学校」という言葉を使った時に思い描いている「学校」と、それを聞いた私たちが描く「学校」とは少し違っているのだという事を理解しておかなければならない。日本人同士でも都心に住む人が描く学校像と地方では異なるものだと思う。過疎地になればなるほど地域の連帯感は強く、学校は文化の中心であり、運動会などは集落をあげての一大イベントと化す。これは良い悪いという問題ではなく、日本人の気質がその土地の中で醸成されていった文化なのではないだろうか。

クラブの話に戻すが、ドイツのやり方はドイツの文化、社会、歴史的背景の中で生まれ育ってきたものであるから、どの部分をお手本とするかは自分の住む場所の地域性、システムに合わせて取捨選択することが必要であると思う。

蛇足ではあるが日本の学校システムが地域に果たしている役割は非常に大きいものがあると改めて感じた。まず子どもたちの競技スポーツへの孵卵器としての役割がある、そして地域の生涯スポーツのゆりかごでもある。また教師という職業はアスリートのセカンドキャリアとして非常に有効に機能している。このようなことを研修中もろもろ考えながら、出発前に描いていたドイツのクラブ像が丸い形に見えていたものが、四角にもなり三角にも見えていった。

ちょうどドリップコーヒーを淹れる器の形のように。

3．総合型地域スポーツクラブ講

今回の研修で一番印象に残ったものは、TUSグレーヴェンブロイヒとオルケン体操クラブである。両クラブとも立派なグラウンドや体育施設を持っていて、クラブハウスにはビアホールまである。しかし施設がいいから印象に残ったのではなく、クラブ理事の方々が我々をもてなしてあげたいと思う気持ち、クラブを誇りに思っている気持ち、それが伝わってきたからである。クラブハウスの壁には歴史を彩るペナントやトロフィーが多数飾られている。その一つひとつがまるで私に対して「日本から来た若いの（私は若くはないのだがその時代の人から見ての話）、ワシの時代はこんなにすごかったんじゃ」と昔話を語りかけてくるようで、熱い気持ちになった。

日本の総合型地域スポーツクラブ (以下総合型クラブ) はいったいどこに向かうべきなのか。何を理想としていくのだろうか。私はドイツから学ぶべき一番大切なものは、クラブを思う熱い気持ち、誇りに思う気持ちではないだろうかと思う。総合型クラブを考える時、日本では運営の自立という経済的側面が語られすぎているように思える。もちろん経済的な自立をすることは大切な事である。ベッカー氏も言っていた通り、クラブの理想を実現するためにはクラブが存続することが一番重要であるという意見は正論である。

しかし日本では職業としてのクラブマネジャーという意味合いが強すぎてはいないだろうか。ドイツではほとんどのクラブが無償ボランティアによりクラブ運営が行われている。職業として成立する程度の報酬を支払える総合型クラブが日本にどれほどあるだろうか。可能だとすれば、各自治体の公共体育施設の指定管理をとることでしか実現できないのではないだろうか。現実にはそのような管理は行政関係の外郭団体が行っているところが多いので調整は難航するだろう。日本が総合型クラブのモデルをドイツとしたこと自体が間違えではなかったかという気がしてならない。

では参考となるようなモデルとはどのようなも

のだろうか。みんながクラブに誇りを持ち、会費を頂戴し、寄付も集まり、そしてその地域のみんながクラブの活動をすることによって楽しくなる団体。このようなものになるのではないかと思う。ここまで考えると身近にいくらでもモデルとなる組織があることに気が付く。この原稿を書いている今日は、長崎市で伝統行事の「長崎くんち」が行われている。龍踊りで有名なお祭りである。この祭りで踊りを奉納する町では7年に一回廻ってくる「踊り町」という名誉にかけて、町費と別に積み立てを行い、寄付も募り、練習を積み本番に備える。自分の町の法被を着ることはこの上なく名誉なことであり、自宅玄関には家紋をあしらった幕も張り出す。稽古日は長老達もやってきてビールを飲みながら見物する。これはまったくドイツのクラブと変わらないではないか。稽古を指導するベテランはもちろん無報酬（日舞など特殊な例は除く）であり、裏方、運営係もボランティアである。唯一本番の年だけ一定期間バイトを雇うくらいのものだ。このような例は、他にも博多山笠、京都祇園祭など全国にいくつもあるだろう。そしてこのような組織をクラブに例えるなら100年どころの歴史ではなく数百年に及ぶだろう。お伊勢参りの伊勢講、相互扶助の無尽講など昔から日本にはお金を積み立てる「講」という組織があった。私は祭りの熱気と誇りをもった講こそが理想のモデルではないかと考えている。この熱気と誇りをどうやってクラブに表現できるかがクラブマネジャーの腕の見せどころではないだろうか。

団員レポート13

座間味　洋貴

NPO 法人　ナスク
理事

1．応募の動機

私が、総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)の運営に携わり早９年が経った。

現在も出身クラブである沖縄県のNPO法人ナスクの正会員として運営に関わることで、クラブのスタッフや県内外のクラブ関係者との繋がりや交流があり、総合型クラブが自身のルーツとなっていることを実感する日々である。

現在もクラブに所属している理由は、クラブ活動を通して様々な経験させてもらえた環境に愛着があるのだと思う。私はクラブの一期生に当たり、同期も数人いたが、現在もクラブへ関わり続けているのは私だけなのだと気づいた時に何か違和感があった。その違和感とは、クラブの会員数が毎年100名から150名前後と特に大きな変動をしないことに疑問を感じたからである。この会員数の状況は以前からも知ってはいたが、今の私のように出身クラブへの愛着をもった会員（OB）が関わり続けていることで会員数は増加していくはずだと思った。

ただ、重要なことは会員数を増やすことを目的とするのではなく、少しでもクラブに関わった者が、継続的にクラブへ愛着を持ち、クラブとの関わりを絶つことのない、メンバーシップを構築することが大切なのではないかと思うのである。そのような環境をつくれればクラブが持続可能な存在として継承されていくと感じた。つまり、クラブの会員が義務感や責務を感じることなく、ごく自然に自らを育ててくれたクラブを残していきたいという思いの連鎖が、結果としてクラブが継承されていく過程でもあるのだろうと思った。

私は、100年を超える歴史のあるドイツのクラブでは、どのようなシステムにより継承されているのかを知りたくなったため本研修事業へ応募した。

2．メンバーシップ～クラブへの愛着とその仕組み～

私が自身の研修テーマとした「メンバーシップ」について最も参考となったのは、今回訪問したTUSグレーヴェンブロイヒ（サッカー部門）である。

このクラブは1911年（103年前）に創設された歴史あるクラブである。サッカー部門の責任者、チームの監督やコーチ、選手との懇談を通し、限られた時間内で深く追求することはできなかったが、以下の３点からヒントが得られた。

（1）コーチや協力者、選手のチームに対する愛着

現コーチはチームにおいて選手経験があり、そもそもコーチ自体が会員の中から選出されるシステムであることから、チームに認められた者として強い誇りを感じている様子がうかがえた。また、私たち日本団員にサーバーからビールを注ぎ、笑顔で振る舞ってくれたチームの会計担当者も印象的であった。ビールサーバーの横に見覚えのある

「S」字の栓抜きがあったので、私が「これは何のロゴか」と尋ねてみると、市内にある銀行（シティバンク）のロゴマークであることが分かった。彼はその銀行で40年務める傍ら、ボランティアでチームの会計を30年担っているというのである。

このように、コーチや会計担当者から感じたことは、チーム（つまりクラブ）への愛着とチームに関わる楽しみ方であった。それはビールを飲みながらスポーツを語り、サッカー談義や仲間と関わることで非日常性を楽しんでいるということ。また、生活を豊かにするためのライフスタイルになっているように思えた。貢献しているという捉え方ではなく、自分が楽しむために関わっているという雰囲気である。

チームのキャプテン（24歳）に、今後10～15年後（選手生活を終えた後）のチームとの関わり方について尋ねたところ、具体的な答えではなかったものの「何らかの形でクラブには関わっているだろう」ということだった。私には、その言葉からは選手を引退してもチームを引退することではないと言っているように思えた。いつまでもチームの一員であるという思いがメンバーシップなのであろう。コーチやスタッフだけではなく、会員にまでメンバーシップが浸透しているように思えた。

（2）クラブハウスの2つの機能

①コミュニケーションとしての機能

クラブハウスの機能として、監督やコーチ、選手はもちろん、選手の保護者や運営に携わる関係者やその子ども達が集まり「コミュニケーションを図る場所」としての機能があった。

今回私たちがクラブハウスを訪れた際に、チームのコーチが息子（小学生）を連れて参加していた。コーチが私たちの対応を行っている間、その息子にチームの選手が楽しそうに会話やボディーランゲージを行い、兄弟であるかのように接していた。この息子にとって選手が憧れで身近なヒーロー的な存在だとしたら最高に楽しい時間だと思われる。大げさかもしれないが、あまり交わることのない世代が、チームを接点に選手やコーチ、その子ども達、関係者が「家族」のように繋がり、クラブハウスが「我が家」であるかのようにコミュニケーションが行われていた。

②歴史を伝える機能

年季の入ったクラブハウスの壁には、クラブの設立年号の記載されたエンブレムや交流を持った相手チームのエンブレム、各大会で獲得したトロフィー、歴代のチームメンバーの写真が飾られ、その対面には、カウンターテーブルやビールサーバー、ビールグラス等のスポーツを語り楽しむツールと、現在のチームのリーグ内順位が一目で分かる順位表が備えられていた。

クラブハウスのコーディネートが意識的か否かは分からないが、後方の壁はチームの過去を知ることができ、前方のカウンター側はチームの現在が表わされているように「チームの過去と現在を示す空間」としての機能が感じられ、コーチや選手、関係者からは、歴史あるチームの今を自分たちが歩んでいるというステータスすら感じた。

このように、クラブハウスは会員のコミュニケーションを図る場所と歴史を刻む空間の機能により、「人と人の縁が切れることのない内面的な繋がり」を構築する役割があると思われる。この内面的な繋がりにより、次の世代の会員に想いや意志が伝わっていく。この繋がりこそがクラブが継承されるということなのだろう。

（3）クラブに愛着を持つという行動心理

チームの運営に関わるコーチや選手から話を聞くことで、歴史あるチームが存続し続けている理由を理解することができた。またボランティアで関わる者は、仕事などの日常から解放され、ビールを飲むキッカケ（非日常的な存在）としてクラブの運営に関わっている様子を感じられた。

つまり、クラブに関わる者の動機は様々であるからこそ、クラブの運営者は、クラブ会員がどのような心境でクラブに関わっているのかを考え、それぞれの行動心理を理解した上で、的確な手段でアプローチすることが求められるのだろう。

3．クラブに関わる全ての人と内面的な繋がりを構築する必要性

日本のような学校部活動などによりクラブ会員のスポーツ環境が変わってしまう中であっても、クラブは定期的に会員に対してイベントや事業への協力を要請するなど、クラブとの繋がりを絶つ必要のない、戻ってくることができる仕組みやキッカケを備えていくことが必要である。ボランティアや協力者、会員の確保などの人的な課題を改善するキッカケは「人と人の内面的な繋がり」ではないだろうか。

私は今後も、クラブの会員が「自分もクラブの一員なのだ」とステータスを持ち、良きサポーターとしてクラブに関わり続けたいと思ってもらえるような、愛着を持った会員が育っていくクラブ運営を目指したい。

4．最後に、本研修を通して感じたこと

私自身、初めての海外渡航であったが、風景や建物、食事や言葉の表現など、文化の違いを楽しむことができ、片道12時間のフライトではあったが、「世界は近い」と感じたことも新たな発見であった。本研修事業が今回をもって終了することは残念であるが、私は今回の研修で感じたことについて様々な場で伝えて行くことを継続していきたい。ドイツでの受入や本研修の準備を行って頂いた事務局や関係者、そして私を推薦して送り出してくれたナスクや沖縄県体育協会へ感謝申し上げたい。